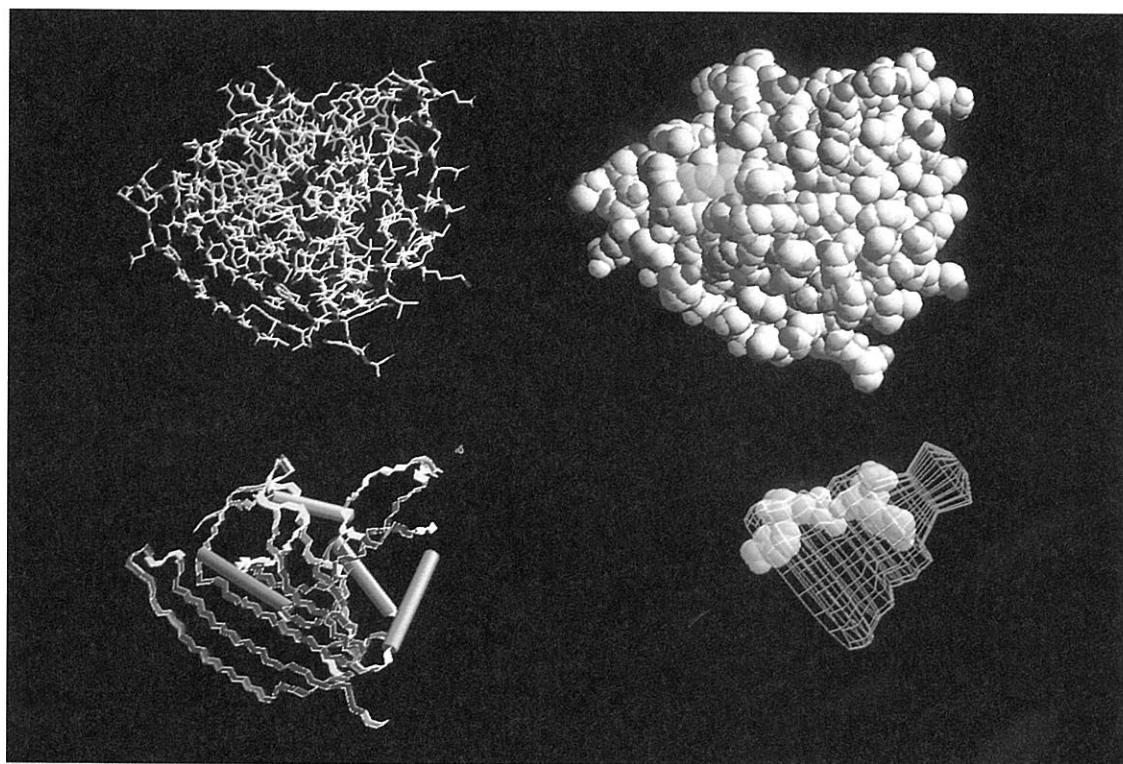


同窓会報



ジヒドロ葉酸還元酵素と基質複合体結晶構造のコンピュータグラフィックス
(右下はコンピュータで解析した受容体ポケットの模式図)。

第 8, 9 号
'91. 12. 15
豊橋技術科学大学同窓会

ご挨拶にかえて

豊橋技術科学大学同窓会名誉会長 学長 佐々木 慎 一

諸君の母校豊橋技術科学大学はひきつづき順調な発展を遂げています。現在、大学は7工学系と1学系とから成り、学部・修士課程・博士後期課程に在籍する学生は総数1832名（うち女子学生87名）に達し、さらに17ヶ国から105名の留学生を迎え入れていました。学生の教育・研究指導には222名の教官があたり158名の事務職員がそれをサポートしています。

先年7番目の工学系（知識情報工学）の増設を果たし、学年進行により本年度から修士課程の設置も実現しました。このような外から見えやすいこと以外に内部的にも大学の充実がはかられています。技術開発センターの増築、講義棟の再増築、情報処理センターの設置（これまでのデータステーションの格上げによる）、図書館蔵書数の10万冊突破、水泳プールの新設さらには地域社会に対する積極的なかわり等々であります。

同窓会諸君のそれぞれの場における活躍はきわめてめざましく、それが社会、産業界に本学の名を高からしめています。私ども教職員は上記の学生たちを諸君のあとに続くものとして逐次世に送り出すための努力を日夜怠りなく行っています。諸君は世に出て他大学の卒業生と職場を共にすることにより自分たちがどんな大学を出たのかを十分に理解されたと思います。他に較べて本学に若し著しく欠けるものがあつたらそれを同窓生の声として卒直に伝えて頂きたい。大学をとりまく環境はいままぐるしく変っているのです。少しでもよい大学創りをするために、本学における教育をよりよいものにするために諸君からの提言も是非伺っておきたいのです。

同窓生諸君にお願いしたいことがあるとすればそれは同窓会事務局のご苦勞に対する理解であります。会

長・事務局長をはじめとするメンバーが同窓会発展のために行う無償の奉仕に対する理解であります。筆者も若い頃同じことに携った時期があります。助手として所属していた一学科の同窓会事務であります。一学科の



それですから大学全体の同窓会事務とその煩雑さは較ぶべくもないのでありますが、大正のはじめから卒業生を出してきていることもあって、そうラクな仕事ともいえなかったのです。平素アンテナを高くして同窓生の動向について気をつけているつもりではあつても、逝去もあるし退職、転職そして転居はきわめて多いのです。名簿の記載事項が違っていると指摘されても通知をもらったわけではないから致し方ないといひわけをしてもはじまらないのです。同窓会便りの執筆を依頼しても締切りまでにすべてが届いたわけでもありません。現事務局も同じ苦勞をしておられる様であります。会員名簿の記載事項を常に正確ならしめるためにも、会報そのものを魅力あらしめるためにも移動通知や要請された原稿はおっくうがらずに送って頂きたい。局員一同になりかわってお願いする次第であります。

世の中はいま地球環境等解決の困難な問題が山積しはじめました。これまでと同じ考えの延長線上でただただ技術開発をすすめてゆくということだけではすまされぬ事態になっています。同窓生各位におかれてもそれぞれの立場でこれからの技術や科学を我々の住む地球環境とどうすれば調和されていけるのか時に深く考えをめぐらして頂きたいものであります。

同窓生諸君の一層のご活躍を期待します。

学 内 近 況 報 告

エネルギー工学系

埜 克 己

暑い夏も終わり、日毎に秋を感じるようになりましたが、卒業生、修了生の皆様にはお変わりなく御活躍のことと存じます。同窓会会報第7号発行（平成元年12月15日）以降、1年9ヶ月間の系内の動向をお伝えします。まず教官の移動ですが、第2回修了生の古内先生が名古屋大学工学部より工学博士の学位を授与され、平成元年12月1日付で助手に昇任されました。平成2年3月11日には中国華中理工大学から袁先生が助手として着任され、大竹先生と共に石炭燃焼の研究に取り組んでおられます。さらに平成2年7月1日付で、二講座の鈴木先生が講師に昇任されました。続いて本年3月、4月には多くの移動がありました。まず長年にわたって、教育・研究ならびに系の運営と発展のために御尽力いただきました草鹿、沖津両先生が、それぞれ御退官ならびに配置換えされました。草鹿先生は東京の御自宅にお住まいで、[株]三豊製作所の相談役をされています。沖津先生は岐阜工業高等専門学校校長に就任されました。両先生とも長年にわたる御業績に対して、4月26日に名誉教授の称号をお受けになりました。また Amubadi S. Kumar 先生は、インド工科大学博士課程を修了して、平成元年10月より助手として、岡崎先生と共にプラズマに関する研究に従事されていましたが、3月31日付で辞職されて国立天文台に移られました。4月1日付で、蒔田先生が教授に昇任され、さらに4名の新しい助手の先生が着任されました。第一講座には、東北大学大学院博士課程を修了された鈴木孝司先生が三田地先生と共に、また本学大学院博士課程を修了された胡勇先生が日比先生と共に、学生・院生の研究指導をされています。第三講座には、富山商船高等専門学校から浦風和裕先生を、久留米工業高等専門学校から江崎昇二先生（昭和59年本学大学院修士課程修了）を迎えました。浦風先生は上村先生のもとで潤滑の研究を、江崎先生は高木先生のもとで制御の研究をされています。4人の先生方ともスポーツマンで、職員系対抗ソフトボール等での上位入賞が期待されます。平成元年4月より本学技術開発センターにおられた上村先生が6月1日付でエネルギー工学系に配置換えになり、8月1日付で畔上先生と

埜が助教授に昇任しました。また事務室では、3年5ヶ月間にわたって担当された鈴木弘子さんが研究協力係へ移られ、庶務課から配置換の羽谷さんが河合さんと共に、事務の仕事をされています。現在の教職員の構成は以下の通りです。熱・流体工学講座 [教授：後藤圭司（系長）、三田地紘史、日比昭、助教授：中川勝文、北村健三、講師：柳田秀記、助手：古内正美、胡勇、鈴木孝司]、エネルギー変換工学講座 [教授：大竹一友、小沼義昭（系長補佐）蒔田秀治、助教授：岡崎健、吉川典彦、講師：鈴木新一、助手：袁建伟、成瀬一郎]、機器設計学講座 [教授：竹園茂男、本間寛臣、助教授：高木章二、上村正雄、畔上秀幸、埜克己、講師：関東康祐、助手：浦風和裕、江崎昇二]、技官：徳増学、森川正治、神谷昌宏、事務職員：羽谷満小、河合美鈴、以上31名です。諸先生方は活発に研究活動され、成果を学会や国内外での国際会議で発表されています。また本間先生は国際協力事業団によるインドネシア高等教育開発計画の実施委員として、たびたびインドネシアに出張され、関東先生は教育指導講師として、平成3年3月上旬の半月間、バンドン工科大学に派遣されました。また畔上先生は文部省在外研究員として、本年10月30日より、10ヶ月間の予定で、アメリカのミシガン大学へ出張されます。

昨年3月には大学院博士課程総合エネルギー工学専攻の修了者6名が初めて誕生しました。本系修士課程から、岩崎隆夫君、出口祥啓君が工学博士の学位を取られました。また本年3月には4名が修了し、武偉君、胡勇先生が学位を取得されています。来年度は6名の本系修士学生が、博士後期課程への進学を希望しています。一方、今年就職状況も好調で、学系50名程の求職者に対し、約500社600名以上の求人があり、殆ど内定しています。これも、これまでに卒業生・修了生の皆様が各職場において築いてこられました御努力の賜物と感謝しています。熱心な求人活動をして頂きながら、御期待に添えられなかった面もありましたこと、お詫び申し上げますと共に、次年度もよろしくお願いいたします。

最後に、皆様の御健勝と今後の益々の御発展、御活

躍をお祈り申し上げます。

生産システム工学系

卒業生、修了生の皆さん、元気に頑張っていますか。同窓会報なるものに初めてお目にかかった学生生活委員である著者が、皆様に生産システム工学系の最近の動きや現状について紹介します。年一回発行されていたこの会報が、89年12月以来出ていないとのことで今回はそれ以降の動きをまずまとめてみます。

89年(平成元年)12月本系の卒業生で川鉄に勤務されていた山本先生が材料保障研究室の助手として赴任され、90年4月には原田先生が広島大学から塑性加工研究室の助手として赴任されました。また同月には工程制御研究室の寺嶋先生が助教授に昇任され、岡根先生が湯川先生の後を受けて、系長に就任されました。10月には材料加工システム研究室の森田先生が電気通信大へ講師として昇任され、またシステム解析研究室に中国から王先生が助手として赴任されました。12月にはワシントン大学におられた尹先生が接合加工研究室の講師として赴任され、福本先生が講師に昇任され、さらに旭硝子から三宅先生が材料加工システム研究室の講師として赴任されました。1991年3月、創立当初から本学、本系の為に貢献された伊藤先生が定年で御退官になりました。教育者として独特の味で学生から大いに親しまれた伊藤先生、残念です。4月には池田先生が仙台電波高専の教授として栄転されました。池田先生も創立当初から本学で御活躍されたお一人でした。また、堀内先生が4月1日付けで教授に昇任されました。5月22日、湯川先生が癌性腹膜炎により逝去されました。享年61歳でありました。先生は開学当初から本学の基盤確立に貢献され、研究の面でも合金設計で世界的に注目される業績をあげておられました。本系としても、これから先生の力に頼りたいという時期に先生を失い、誠に痛恨の極みです。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。機械材料研究室の

梅 本 実

教授には、9月1日付けで森永先生が昇任されました。また、同日、竹中先生が精錬工学研究室の講師として、東北大学選鉱精錬研究所から赴任されました。寺嶋先生は文部省在外研究員として、9月17日より1年間の予定で、ドイツ・ミュンヘン工科大学へ長期外国出張されました。

就職状況ですが昨年度も本年度も求人ラッシュです。昨年度は662社、今年度は715社からの求人があり、毎年記録を更新中です。これも日本の景気がすこぶる好調であるからですが、同窓諸君の活躍に負うところが大きいのも事実です。

現在の生産システム工学課程、生産システム工学専攻および生産システム工学系の構成は以下の通りです。

1年生 17名, 2年生 19名, 3年生 65名,

4年生 66名,

修士1年 59名, 修士2年 53名,

博士1年 1名, 博士2年 1名, 博士3年 7名

[加工学講座] 中村教授, 岡根教授, 星教授, 堀内教授, 牧助教授, 梅本助教授(工作センター), 福本講師, 原田助手

[材料学講座] 川上教授, 森永教授, 小林教授, 新家助教授, 竹中講師, 村田助手, 横山助手, 山本教務員

[生産計画学講座] 北川教授, 西村教授, 野村教授, 小野木助教授, 寺嶋助教授, 三宅講師, 王助手, 堀畑助手, 猪股助手
学系長は岡根先生です。

それでは、生産システム工学系職員一同、卒業生及び修了生の諸君の一層のご活躍を期待しています。

電気・電子工学系

卒業生・修了生の皆さん各職場で元気に御活躍のことと思います。前回の同窓会報(平成1年12月)からずいぶん時間がたち、大学全体としてもスタッフが変わ

朴 康 司

りました。まず、新学長として佐々木先生が就任され、仙台電波高専から高橋先生が、また4系から楠先生が、それぞれ副学長として迎えられ新体制を組むこ

とになりました。次に電気・電子工学系の教官の異動についてお知らせします。基礎大講座におられた野田保教授が平成2年3月に退官されました。野田先生は現在、豊橋短期大学の非常勤講師をされるかわり、サイエンスクリエート21（豊橋での新しい技術核作り）に尽されております。又同じ大講座で助手をされておられた塚本先生（野口・太田研）が豊田高専へ、渡辺先生（英研）が北海道大学に転出されました。電子デバイス大講座では、吉田明教授が平成3年4月から2年間、岡崎の分子科学研究所の教授として在籍することになりました。分子研ではシンクロトロン放射光（SOR）を使った最先端の研究をやられています。これに対して、新任の先生として、平成2年度から山口先生（藤井研助手）、及び滝川先生（榊原研助手）が新しいスタッフとして加わりました。両先生とも本技科大3系の出身です。更に、平成3年度には、八戸高専から電気システム大講座に土屋先生が講師として迎えられました。この様な異動を含めて、平成3年8月時点での3系の教官スタッフは次のようになっています。

[基礎電気・電子大講座]

教授：野口精一郎，藤井寿崇（系長補佐），

英貢

助教授：太田昭男，西垣敏，服部和雄

助手・技官：山口一弘，小山晋之（技開発センター），前田勝典

情 報 工 学 系

卒業生・修了生の皆様、いかがおすごでしょうか。かくいう私も修了生の一人です。もっとも、物質の一期生ですので知らないかたの方が多いと思いますが……。私事が先に来てしまいました。それでは、ここ2年間の情報工学系の近況を述べたいと思います。

まず、現在の教職員の構成メンバーを見ていただきましょう。

[計算法大講座]

教授：大岩元，中川聖一

助教授・講師：今井正治，湯浅太一，奥山徹

助手・教務職員：山本幹雄

[情報処理大講座]

教授：阿部健一，白井支朗

助教授・講師：橋口攻三郎，榊原学，船橋寛一

助手・教務職員：戸田尚宏，石井宏幸

[電気システム大講座]

教授：榎本茂正，小崎正光，榊原建樹

助教授：長尾雅行，水野彰（技開発センター），
土屋幸男

助手・技官：水野幸男，滝川浩史，日比美彦

[電子デバイス大講座]

教授：中村哲郎（系長），米津宏雄

助教授：並木章，朴康司，石田誠

助手・技官：斎藤洋司，高野泰，川人祥二，
足木光昭

西垣先生は今年8月から来月の3月まで、フランスに留学されております。ヨーロッパにお越しの節は、是非お立ち寄り下さい（おいしいフランス料理にありつけるかも知れません）。

本年度も就職の方は、相変わらず売り手市場であります。ここしばらく見られた第3次産業への就職者も、バブル経済がはじけたせいもあり、少なくなってきたように思います。

卒業・修了生の皆様、実際の社会に入ってみていかがでしょうか。恐らく学生時代のようにのんびり過ごす時間が激減したのではないのでしょうか。反面、仕事の面白さを感じておられる方もいるでしょうし、壁にぶち当たっている方もいるかも知れません。苦しいとき、人生の転機を決意するときもあるでしょう。そのようなとき、諸先生にも是非、御相談下さい。

奥 山 徹

[情報システム大講座]

教授：秋丸春夫，宮崎保光，田所嘉昭

講師：後藤信夫，村上純

助手・教務職員：鄧天波，奥田隆史

以上のようになっています。お気付きのように、多くの先生方の異動がありました。まず楠先生は昨年、副学長になられました。河竹先生は平成3年3月いっばいで停年退官なされました。また、飯田先生は中京大学へ、辰巳先生は大阪市大へ、永持先生は京都大学へ、前場先生は神戸商船大学へ、劉先生が豊橋短期大学へ移られました。最後に河合先生が知識情報工学系の講師になられました。

一方、村上先生が平成3年4月に熊本電波高専から、戸田先生は平成2年4月、石井先生が平成3年4月から、いずれも本学の大学院博士後期及び修士課程を修

了後、着任されました。また、鄧先生は東北大学の大学院修了後、平成3年4月に着任されました。最後に私ですが、平成2年8月に古巣の情報処理センターを引き払ってこちらにお世話になっています。

こうして見ると完全な出超で、最近の情報工学の隆盛のあおりをもちに受けている感があり、喜ばしくもきびしい状況にあります。

さて、人事面以外でもいくつか大きな変化がありましたので報告しておきます。計算機センターが情報処理センターに昇格したのは平成元年のことですので、どこかで報告されていると思いますので略します。大きな変化の一つは学内に情報ネットワーク（100 Mbps 光ループ + Ethernet）が敷設されたことです。これにより、計算機の利用環境は（少なくとも私にとっては）飛躍的に向上しました。学内のネットワークを昨年からJAINと呼ばれる大学間のip接続網に接続しましたので、いろいろなところ（主に大学ですが）との情報の交換がたいへんスムーズに実現できるようになりました。次の変化は、長らく情報工学系の教育用計算機として君臨してきた（？）MELCOMが

ついに引退したことです。最近の卒業・修了生はそうでもないかもしれませんが、一期、二期生にとっては、いろいろと思い入れのあるマシンでした。現在は、その代わりに知識情報系と合同で、Sparc station IPCを61台導入し、教育用計算機システムとして利用しています。

ところでみなさん博士論文の提出の用意は整いましたか。博士課程が設置されて以来、本学修了生の論文博士の審査が増えています。今、企業で研究している皆さんすべてにチャンスはあります。是非チャレンジしてください。

先生の顔ぶれも変わり、学生の顔見知りも少なくなり、学生時代に使っていた計算機もマシンルームからなくなり……等々、大学への足が最近遠のいてはいませんか。時には大学へ来て、なつかしさと変化の香りを楽しんでみるのもよいものですよ。近くまでいらした折には、気楽るにたち寄ってください。末筆ながら、皆様の御健康とますますの御活躍を心よりお祈りしております。

（平成3年8月）

物質工学系

同窓会の皆さんいかがお過ごしですか、同窓会報第8号が出版されるようですので、先ずは、物質工学系の構成メンバーからお知らせしましょう。

平成2年3月31日付で浅田栄一教授が定年退職され、同年4月1日付で稲垣道夫教授が北海道大学工学部教授として転任され、また、平成3年3月31日付で高山雄二教授が停年退職されました。一方、平成2年3月長畦慎一助手、平成3年4月水嶋生智助手、松本明彦助手の先生方が赴任されました。また、阿部教授、宮下助教授、船津講師が知識情報工学系（7系）へ移られ、現在の物質工学系の教職員の構成メンバーは次のようになりました。

工業無機化学講座（3階）には、亀頭教授、上野教授、逆井教授、大串助教授、角田助教授、前田講師、水嶋助手、佐藤教務職員、齊藤技官。工業分析化学講座（4階）には、小松教授、鈴木教授、神野教授、青木助教授、平田助教授、藤本助手、長畦助手、太田技官。工業有機化学講座（5階）には堤教授、伊藤（浩）教授、伊藤（健）教授、竹市助教授、西山助教授、永島講師、伊津野講師、松本助手、川口助手、坂井技官。分析計

小松弘昌

測センターには、加藤助教授、服部助手が居られ、また、4階で伊藤事務官が系事務を担当されています。

学生諸君への求人情況も例年のごとく、有難いことに良好で、平成2年度の修士修了者42名のうち36名がそれぞれ一流企業や官公庁に就職し、残り6名が博士課程に進学しました。また、学部卒業生9名も大手企業に就職して居ります。学生の在籍者数は1年次15名、2年次24名、3年次53名、4年次63名、修士1年次47名、修士2年次37名となり、平成3年が始まっています。

平成元年度に課程博士第1号が誕生して以来、平成3年3月31日現在で課程博士第47号まで授与されましたが、この間、論文博士も第19号を数えるようになりました。この論文博士のうち論文審査委員長が5系の教授であったものが4件ありました。これは社会へ出て、研究業績を挙げられた卒業生の方がたへの博士授与の実績であります。さらに、卒業生の皆さんから学位論文が提出されることを望んでいる次第です。末筆ながら同窓会の皆さんがご健康で、益々活躍されることをお祈りいたします。

建設工学系

平成2年1月よりの動きを紹介します。

平成2年3月には環境大講座の四倉教授が定年退官されました。昭和60年2月より5年間に渡り水工学の教育・研究にあたられました。現在は豊橋女子短期大学で豊橋美人のインテリジェンスに磨きをかけておられます。その後任として、京都大学防災研究所から石原安雄先生が赴任されました。石原先生は京都大学防災研究所所長や日本災害学会会長などの要職を務められておられます。この平成3年は就職担当としてもご活躍いただいています。

石原先生が赴任された平成2年4月には、構造大講座に山田聖志助教授が東北大学工学部建築科より赴任されました。シェル構造の非線形挙動などについて活発に研究されており、構造力学などの講義を担当されています。また、同じ平成2年4月には本学の博士課程を修了した高島英幸先生が構造大講座の助手になりました。

平成2年3月には、計画大講座の小川保助手が江戸東京博物館へ、構造大講座の田坂誠一助手が北九州職業短期大学へ転出されました。また、その5月には環境大講座の澤地孝男助手が建設省建築研究所へ異動されました。若手の活発な研究者が転出されるのは残念でしたが、新任地での活躍を期待しています。

建設工学系での異動が多いことや昨年同窓会会報が出されていないため、教室の動きについてももう少しお

知識情報工学系

知識情報工学系の現況を報告します。

設備としては、本系の研究棟が昨年度完成しました。続いて今年第2期工事として実験棟が完成し、引越を待つばかりとなっています。

研究棟の1階には60台の高性能ワークステーションが設置され、C言語を中心とした非常に幅広い演習が行える環境になっています。

一方、研究棟、実験棟にはLANが完備され、研究室間、あるいは他大学とのコミュニケーションが電子メールを使って行われています。加えて、前述の60台のワークステーションもLANに接続されており、一部の授業レポートをメールにより提出、といったこ

河 邑 眞

知らせします。平成2年3月には、徳山工業高等専門学校から赴任していただき、2年間に渡って構造大講座の講師をお務めていただいた原隆先生が退任され徳山にもどられました。平成3年5月からは豊田工業高等専門学校より草間晴幸先生が構造大講座助教授として着任されています。また、平成3年4月には浅草肇先生が助手に昇任されました。

平成3年4月には佐藤彰治先生が建築環境講座の助手として釧路工業高等専門学校より着任されました。また、藤田勝也先生が計画大講座の助手としてこれ、建築史の研究をされています。

平成3年4月より北尾高嶺教授が系長を担当されています。

以上が教官の異動についてのお知らせです。

その間に、高島英幸、片田敏孝、山田守、葛甬生、間瀬実郎の各位が工学博士の学位を豊橋技術科学大学より授与されました。これらの若手をはじめとして豊橋技大では活発な研究が行われ、優秀な卒業生を輩出しています。現在の学生数は学部168名、修士99名、博士14名です。

就職の状況はこの2年間は大変順調で、企業によっては何人でも採用しますといったところもあるようです。先輩諸君が優秀であるという評価から求人も順調です。同窓生の皆さんの益々の活躍と研鑽を積まれることを期待しています。

高 橋 岳 之

とも行われています。

次に、教職員の構成は以下のようになっています。なお、本学系は4コース制をとっています。

[情報科学コース]

教授：伊藤嘉房，阪田省二郎，斎藤制海

助教授：増山繁

講師：河合和久

助手：中山雅哉

教務職員：高橋岳之

[分子情報工学コース]

教授：大澤映二，阿部英次

助教授：宮下芳勝，高橋由雅

講師：船津公人

助手：DEL CARPIO CARLOS ADRIEL

[機能情報工学コース]

教授：吉田辰夫，山本真司

助教授：吉澤誠

講師：杉田陽一

助手：神山斎巳

[社会経済工学コース]

教授：鈴木康

助教授：朝日讓治，氷鮑揚四郎，太田敏澄

この先生方の顔ぶれをみてお気付きの方もいらっしゃるかもしれませんが、研究内容という面から見ますと非常にバラエティーに富んだ系となっています。

さて、学生の構成はといいますと、1年次13人，2年次12人，3年次58人，4年次55人，そして修士1年次39人です。

最後に、1年後には修士修了生を社会に送り出すこととなります。本会会員の先輩方には、これら本系の新会員を暖く見守ってくれるとともに、新しくできた学系をぜひ訪れてくれることを願っています。

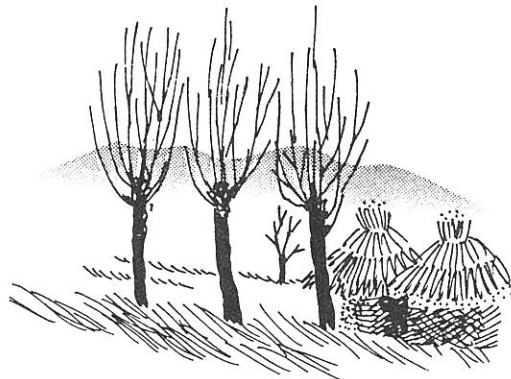
第 8 学 系

尾 崎 一 志

1991年3月に外国人教師のロビンズ先生が退官され、イギリスへ帰国されました。代わって4月にはリチャード・ジョゼフ・マーシャル先生が着任されました。先生はカナダのブリティッシュコロンビア大学、同大学院を修了され、その間4年程岩手などで英語を教えて来られました。写真でお見せできないのが残念ですが、いかにも豊橋にふさわしい風貌と性格のように見受けられます。外国人教師の先生方はいままで大体3~4年程で移っていかれるようですが、マーシャル先生には長い間豊橋に居ていただける様な気がしま

す。

更に7月には村松由起子先生をお迎えすることができました。先生は日本語文化を大学院で専攻され、本学に2人目の日本語教育担当の先生として着任されました。専ら留学生に日本語を教えられるので、一般の学生とは接触の機会ほとんどありませんが、先生は学部学生としてはフランス科を卒業されているので、忘れてしまったフランス語を仕事などで必要とする時には是非教えを請いに来学して下さい。



退官教官より

平成元年度

《退官にあたり》 初心忘るべからず

※この原稿は、大学の協力により「天伯」から転載したものです。

前学長 本多波雄



1. はじめに

本日は、退官記念講演の機会を与えていただき、光栄に存じます。また、学内外から、多数の方々にご出席いただき、厚く御礼申し上げます。

退官までに、余すところ1ヶ月を切りました。改めて、本学在任中の9年間を振り返ってみますと、一瞬の間に過ぎたような気もしますが、また、心に残ることも多く、それらを思い出していると、長い年月だったという気もします。いずれにせよ、万感こもごも胸を打つというのが、今の心境であります。

2. 本学とのなれ初め

私が、本学に係わりを持ったのは、昭和51年10月、本学創設のときまでさかのぼる。当時、発令された教職員は、榊学長、小池事務局長、他に若干名の事務官だけであった。そこで、基本問題検討委員会が設置されて、教授会ができるまでの間、その役割を代行することとなり、私もその一員に加えられたのである。

委員会発足当初のメンバーは、学長を委員長とし、以下、齊藤武（北大）、西成基（名大）、家田正之（名大）、菅野卓雄（東大）、本多波雄（名大）、武内次男（名大）、横尾義貫（京大）の諸先生であり、さらに、翌年4月、小林陽太郎（東工大）、土居敏雄、富田弘（愛知県立大）の3先生が加わった。私は、東北大から名大に転任した直後であり、東北大の事情に通じていた。榊学長は、人事を進めるに当たって、学閥をつくらぬことを基本方針とされたが、この委員会の構成にも、その考えが窺われる。

これらの先生方のなかで、私が、最後に本学を離れる者となった。そこで、この機会に、本学創設の初心を、私なりに、皆様にお伝えして、退官の言葉としたい。

3. 大学のライフ・サイクル

大学には、ほぼ20年から25年の周期を持つ、ライフ・サイクルがあると思う。この周期は、親子の世代交替の周期にも当るし、また、教授の在任期間にも相当する。1周期は、創成期、成熟期、衰退期（再生期）と進行していく。

このライフ・サイクルを、本学に当てはめて、考えてみよう。創成期は、創設から、昭和54年3月の学生受入れ、学年進行と続き、修士課程修了生を生み出すころまでで、ほぼ、榊学長の時代である。この当時、全学の教職員、学生の中にみながっていた熱気と連帯意識とは、私にとって、かつて経験したことのないものであった。それは、新しい構想の大学を自分達の手で、理想的な姿に育てようという気持が結集されたもので、一種の熱病にかかったような状況であった。こうして、本学の基礎が築かれたのである。

それ以後、今日までが、成熟期に当たる。大学院博士課程の設置、計算機センターから情報処理センターへの組織替えなど、前期から積み残された事項の実現とともに、知識情報工学課程の新設、産学交流や国際交流の量的拡大など、いうなれば、創設期の延長線上で、一層の充実を図った時期である。したがって、着実な発展を遂げてはいるが、反面、環境に安住し、大学全体を挙げて事に当るといような求心力は乏しくなっている。

本学は、これからライフ・サイクルの第3期に入る。これが衰退期となるか、再生期となるかは、本学の将来にとって、極めて重大なことである。この期間に、大学の新しい施策を設定して、全学の協力で、その達成への努力が行なわれるならば、大学は、再び、活気に満ちた次のサイクルを迎えることができよう。しか

し、単に惰性に流され、従来の延長線上に留まっているなら、残念ながら、衰退の道をたどることになるだろう。

4. 初心忘るべからず

「初心忘るべからず」というのは、能役者である世阿彌が残した有名な教訓で、常識的には、「初心のまじめな覚悟や情熱を忘れるな」という道徳的な教えと解されているが、本来の意味は、もっと厳しいものであった。彼の言わんとするところは、「初心の芸は未熟なものであり、上達を怠れば、たちまちその段階へ逆もどりしてしまう。初心の芸を忘れまいとするのは、自分の芸境を見失なわないためにある。初心の芸を忘れれば、初心のレベルに退歩するというを、肝に銘じておけ」というのである。

本学の創業期には、「88番目の国立大学」というのが、合言葉になっていた。これには、二つの意味が込められていたと思う。一つは、既にある大学と、同じことをしていれば、本学の順位は88番という低いところに置かれるという、現状認識であり、もう一つは、末広がり之数にふさわしく、ごぼう抜きをして、高い順位を占めようという願望である。幸いにして、技術科学大学の基本構想には、高等専門学校卒業生の3年次編入学、学部・大学院一貫教育、産学交流など、当時、他大学では殆んど行なわれていない企画がふんだんに盛り込まれている。これらの斬新な構想を、数ある大学の中で最初に実現し、先導的役割を果たすことが、本学の発展する道だというのが、創業期の初心であったと思う。

これまでの本学の歩みは、教職員・学生の、1日を25時間と見紛うほどの頑張りにより、多くの難関を乗り越え、順調に進んできた。しかし、独断を申するならば、いま、ライフ・サイクルの第3期にさしかかっていると思う。本学が、他に先駆けて実施してきた諸事業も、多くの大学が取り入れるようになり、必ずしも本学だけの特色とはいえなくなっている。

事実、3年次編入学については、高等専門学校から大学に進学する学生の過半数は、技科大以外の大学を選んでおり、しかも、この傾向は、今後、ますます拡がるであろう。また、産学交流についても、多くの大学で力をいれるようになり、本学の技術開発センター

を手本として、同種のセンターが、続々と誕生してきている。

このような状況の下で、本学が、これまで行なってきた施策だけを繰り返しかえしていれば、遠からぬうちに、再びもとの88番目の順位に転落する恐れがある。ここでいま一度、創設時の心を思い起し、第3期を、次のサイクルへの再生期としていただきたい。これが、非礼を顧みず、「初心忘るべからず」という標題を掲げた所以である。

5. おわりに

学問の発展過程は、創造、伝達、応用のからみ合いであるという。新しい知見の発見は、伝達によって共有され、学問体系として整えられる。また、その成果は、応用によって、社会に還元される。同時に、伝達と応用によって、さらに、新しい創造が促進され、学問が発展していくのである。特に、工学のような実学の分野では、応用の役割が大きい。

学問の場としての大学には、創造、伝達、応用に対応して、研究、教育、社会サービスの三機能が必要である。しかし、わが国の大学では、これまで、研究と教育だけが、重視され、社会サービスは軽視されてきた。

本学が、創設の目標として、実践的、創造的能力の育成を掲げているのは、私なりに解釈すれば、上述の三機能の重要性を踏まえた主張であると思う。そのためには、学生をして、知識の修得だけに留まらず、研究に自らたずさわり、創造と応用を含めた、学問発展の全過程を学習させることが重要である。本学が特色としてきた、学部・大学院一貫教育や、産学交流等は、本学の志向する教育を行なうのに有効であった。しかし、大学を囲む環境は変化する。この変化に対応して、新しい企画を立て、それを実行していかねばならない。単に、従来のやり方を繰り返していたのでは、いずれ沈滞を免がれないのである。

終りに、佐々木新学長の下、本学創設の目的に向かって、「初心を忘れず」、全学の力を結集して、活力ある大学であり続けていただきたいと、切に希望して、お別れの言葉とする。

——思い出と期待——

前副学長 西 村 正太郎



昭和62年5月から、前任の古屋先生のとを承りましたが、これということもできないまま、去る3月末退任しました。かえりみて忸怩たるものがありますが、それにもかかわらず、学長先生はじめ教職員の皆さんから格別のご高情を頂き、心から感謝しています。

本学と私の最初のかかわりは、榊先生が初代学長として、大阪大学をお訪ね頂いたときでしょうか。開学に当って、各分野の優れた教官を集めたいとのこと。熱意溢れる先生の言葉に感銘をうけたことを思い出します。その後、暫くして阪大で定年を迎えましたが、はからずも阿南高専の校長を勤めることになり、今度は高専一技科大という深いつながりのもとの、それぞれ色々お世話になりました。

そうした私が本学に来てまず感じたのは、榊先生の言葉通り優れた先生方が、ひたすら教育・研究に、情熱を燃やしておられるということでした。学内の活気とアカデミックな雰囲気は、さすが技科大。建学の精神と創設の意気込みが、そのまま学風として定着しているというのが第一印象で、それがいまま変わらないことを嬉しく思います。

本学創設の基本構想は、戦後の学制改革を機に作られた大学と異なり、創設の当初から博士課程を置く新構想の大学院大学です。たまたま、国の財政再建という困難な時機に当り、その構想実現にはひとかたならぬ苦労があったわけですが、すでにその完成を見た上に、新しく知識情報工学課程も設置され、次の時代への発展に踏み出したところでは、目覚ましく進展する技術科学の時代、私は本学の将来に大きな期待をもっています。

* * *

在任中の私の担当は学生諸君の教育・厚生補導。入

学から卒業・修了まで、みんな健康で充実した学生生活が送れるような環境作りとなると、やはり気の抜けない毎日でした。学内のいろんな委員会なども、委員の先生方の熱心な議論に敬意を表しながら、ときには心ならずも厳しいことをいったこともあるようで、申し訳なく思っています。

大学入試の状況が年々変わったことも、在任中の思い出です。高校生の進学熱の高まりと複数受験の要望から、連続方式のほかに分離分割方式をとる大学が多くなりました。また、高専卒業生を受け入れる大学が増え、旧帝大系もすべて門戸を開いて、高専の学生には進学の道が広くなりました。こうした情勢に、本学の求める資質や能力を有する志願者が減るのではないかと、という一種の危機感が生まれたのは残念でした。

しかし、本学はもともと学部から修士課程まで一貫した大学院大学。大学院の弾力化に最も適した学内制度と組織をもっています。実施可能なところから積極的に推進して頂きたいと思います。優れた教育・研究活動の成果に加え、こうした新しい大学院制度は、心ある若者達には必ず魅力ある大学として期待されるに違いありません。危機ではなくて好機というべきではないでしょうか。ただ、大学の真価は5年や10年で決めるものではありません。時代は急速に変わってゆかしょうが、目先きの変化にとらわれることなく、建学の精神と情熱を堅持して頂きたいと思います。

創設のご苦労も知らずに、口はばったいことを申しました。老婆心からと思って頂いて結構です。わずか3年足らずの短い間でしたが、在任中の思い出は尽きません。そして、技科大を愛する気持ちは、いつまでも変わらないと思います。

* * *

最後に、学長先生はじめ教職員学生の皆さんの一層のご活躍と、本学の発展を心から祈念して、退任のご挨拶とします。

電子・イオンビームと私

第3 (電気・電子) 工学系 教授

野 田 保



昭和と同じ年の私は倉敷に生まれ、日本が世界の孤児となって戦争に傾斜して行った暗い時代に育った。旧制中学時代はラジオと機械体操に熱中したが、4年生から猛勉をして旧制第六高等学校

校の理科乙類に進学した。やがて成人した春、敗色濃厚な中に卒業を迎え、物理へ進学を志したが、衣食住ままならぬ都会の大学へ行くには、次兄の住む名古屋が最も現実的な選択だった。

昭和23年春の卒業が迫っても求人はなく、当時高蔵にあった工学部で職を探し、卒業研究の真空蒸着経験によって拾われた榊研究室で、日立製作所が社外に納入した最初の電子顕微鏡(EM)に初めて対面した。真空排気や写真乾板交換を容易にする為改造に熱中していた縁で、27年に日立へ中途入社した。当時は大量解雇の直後で採用を中止していたから、全く幸運と言うほかない。スカウトしてくれたのは中央研究所の只野博士だったが、所属されたのは勝田市にある多賀工場の精器課であった。

当時日立では、新機種HU-9型の緊急開発を迫られており、入社早々の私とその鏡体設計を分担した。この製品は3段色消しレンズの採用により、性能が飛躍的に向上した上、装置の背が低く、軸調整が極めて楽になり、新製品は大成功を取めた。

EMの売行きが順調に伸び、輸出計画が進んでいた30年2月のある朝部長に呼ばれ、突然質量分析計(マス)グループへの転属を命じられた。かつて無機ガスの分析に使われていたマスが、戦後は石油の組成分析に応用され、イオン源などが汚れて不安定となり、顧客のクレームで引き取り対策中であった。入社時の約束と違うから辞めると反抗したが、只野博士に宥められ、未知の分野に飛び込む決心をした。まず事故対策中の現場でマスに直接手を触れながら勉強したが、これがイオンビームとの初対面であった。設計から手配内容に逐一検討を加え、現場主導型の対策を徹底実施した後、再据付けに出張して長期安定度を確認、引渡しを完了した。

翌31年早々、この経験を新型の設計に生かせと命じられ、開発したのがRMU-5型である。この装置は排気能力が格段にすぐれ、性能も安定で好評を得、やがて高価な輸入機種と競合して国内市場を独占した。入社時の精器工場はその後日立市の親工場に吸収されたが、36年2月、再び勝田市に那珂工場を新築して独立した。

マスの主な市場だった石油化学分析の分野はその後現れた廉価なガスクロマトグラフに次第に置換されたが、一方で有機化合物の同定や構造解析に用いる新しい応用分野が開けて来た。その頃提携が決った米国パーキンエルマ社が、抜群の競争力に注目して、我々のマスを全世界へ輸出することになり、38年2月新型のRMU-6を先方に据え付け、私がインストラクターとして5ヶ月間出張滞在した。

当時世界一だった米国C社、西独A社との競合に勝ち、需要増との相乗効果で売行きが大きく伸び、最盛期には米国におけるシェアが55%に達した。利益率が高いため業績への寄与も大きく、欧米にも頻繁に出張させて貰ったし、製品計画に対する対見も尊重され、この数年間は私の人生で最も充実した時期であった。

昭和43年、それまでの専門職から部長に昇格の内示があり、ライバルの台頭によるマスの将来不安と持前の管理職嫌いから固辞したが、強制的に引受けさせられ、数年間憂鬱な時代を経験した。やがて私の危惧は現実となり、ライバルの急追を凌ぐ格段の高性能化を迫られ、51年に再び専門職に引き戻された。立体集束二重集斂方式の新型M-80の製品設計中に技科大の教官募集の話を聞き、54年度赴任でも良いことを確かめて応募した。

技科大では基礎電気電子講座のメンバーとして、イオンビーム計測に関する開発研究を行ったが、表向きの所属は情報工学系で、61年度にポストが追加配分されてから電気電子に転属した。電子分光法による固体表面の研究を専門とする西垣敏助教授と実験室を共有したが、先生には研究・教育の面で終始手伝って貰った。研究テーマは、二次イオン質量分析(SIMS)用の

高輝度表面電離イオン源の開発を計画し、初めて56年度の科研費(試験研究)を申請した。また以前から進行中だった技術開発センターの電子ビームリソグラフィ設備が56年度に認可されたが、申請時の予算が1000万円と1/5に圧縮された。設備の購入を断念して研究費に当てるという私の提案がセンターの産学共同プロジェクトに採択され、私を代表者とするマイクロビームリソグラフィの研究を始めることになった。

きわめて厳しかった予算圧縮を緩和するためか、55年度末に突然1000万円の設備費が枠外で決まった上、申請していた私の科研費600万円も認可される幸運に恵まれ、またプロジェクトのための客員教授のポストに、当時日立製作所の常務だった渡辺宏博士を榎学長が自ら折衝・招聘された。これに伴い、日立中研から田村一二三博士らの専門家が毎月熱心に来学されたので、研究は急速に立ち上がった。更に系内では乏しい助手のポストを厚意的に配分され、56年10月に奥谷剛博士が阪大から着任し、開発研究は一層加速された。

このプロジェクト研究に使用する液体金属イオン源(LMIS)は、科研費によって開発する表面電離イオン源との共通部分を多くして設計手数を省き、また集束イオンビーム(FIB)光学系には、4系の大岩教授が考案したユニークな方式を採用し、彼の科研費の300万円を投入して、2回生の津曲隆君を当てて実際に設計・試作し、直径0.2ミクロンに絞ったガリウムのFIBを2ミリ四方に掃引してもビームが広がらないことを実証した。このプロジェクト研究は、国際会議も含めて国内外に成果を逐次発表し、大手新聞や内外の専門誌にも報道され、60年度末まで5年間継続した。

また58年度からの3年間は、新設の産学共同研究制度により、イオン・電子ハイブリッドソースの開発をプロジェクトと並行実施した。液体チップからは安定な電子放射が得られないと言われていた従来の定説を覆したもので、この成果も内外に発表し、新聞や専門誌に紹介された。5回生の畑浩一君はこの研究に傾倒して博士課程に進んだ。

一方日立中研から寄贈してもらった在来方式のFIB-SIMS装置を改造し、奥谷先生が得意なイオンビーム励起発光分析(SCANIIR)を併用してスパッタリングの研究を開始したが、奥谷先生自身は白血病に冒され、60年7月に急逝された。前途有望な生涯を34

歳の若さで閉じたことは痛恨の極みであるが、同門の後輩である後任の井上雅彦助手が遺業を引き継ぎ、SIMS/SCANIIRの研究は今でも続いている。

技開センター助手だった斉藤弥八博士とその後任の竹田真帆人博士は、センターの共用機器に堪能な人材を望まれて私が推薦したが、前者は原子クラスターの質量分析、後者は高分解能EMの専門家で、両者とも野田研の学生が大変お世話になった。特に前後のLMISマスによるイオンクラスター分析の成果は国内外から注目され、東北大、神戸大と並んでわが国におけるクラスター研究の三大拠点として重点領域研究が計画されたこともある。先生が60年に名大へ転勤されてからも、マス1台を移管して相補的な共同研究を進めた。

井上・竹田両先生は私の退官以前にそれぞれ名大と阪大に転勤され、私の研究活動は終わった。電子ビームとの初対面から42年、イオンビームに出会ってから35年経ち、この間23回海外渡航した。また私の研究室にいた30名の卒業生の中から、文中に名前を挙げた2名の工学博士が誕生した。

過去を振り返って見ると、しばしば幸運に恵まれ、周囲の人達に助けられて実力以上の成果が挙がり、充実した日々を過ごすことができ幸せだった。昭和と同年齢の自分は昭和と共に舞台から降り、平成の時代に活躍する人達のお手伝いに、健康の許す限り余生を捧げたいと思っている。

電子・イオンビーム以外との交際については省略しましたが、3・4系の皆様を初めとする教職員の方々、技開センターでお世話になった方々、コーラスと一緒に遊んで下さった方々、それぞれに思い出は尽きません。有難うございました。最後に技科大の発展と皆様のご健康をお祈り致します。



大学の使命について

第6 (建設) 工学系 教授

四 倉 信 弘



昭和60年3月に米国から赴任してきた時は、心気一転の発想で行こうと単純に考えた。然し5年の月日が過ぎて停年を迎えてみると、教育という仕事は研究と違って、心理学の理解と永い体験が

肝心で新米教師の発想位ではどうにもならないと判ってきた。そんな心境ではあるが、雲雀ヶ丘だよりが退官教官に最後の執筆機会を与えてくれる由なので、日頃の発想の一部で持っている学生諸君への期待、希望、そして不満等をまとめてみようと思う。

大学教育には高等職業訓練という第一の使命と高度の学問や知識の追求開発という第二の使命があるが、これらについては常に多くの議論がなされているのでふれない事にする。私としては大学教育のもう一つの使命である社会の指導者としての教養と識見を養うという面をとり上げたい。現在の大学ではこの観点がり上げられる折は少ないが、やはりこれはどの時代でも大切な使命であって世代から世代に受けつがれてゆくべきであろう。

今東欧や中国で起こっている民主化のニュースを聞くにつけ、こうした運動の中核となっているのは常に大学生であり、その純粋な正義感と進歩への情熱は社会改革に欠かせない要素なのだ痛感させられる。そうした変革に直面しない高度に民主化された社会においても、近年は政治、法律、経済、技術、科学等の有機的な関連が強くなり、専門化によって細分化されればされるだけその社会には総合的視野なり判断が必要となる。原子力発電是非の問題、地球規模の大気汚染の解決等は切実で身近な例である。

更に21世紀を迎えようとしている世界の中で日本の役割を考えて見よう。それは今までの100年余りのように、すべて欧米の文物をモデルとして習い使えば良かった国内志向型の日本ではあり得ない。

少なくとも経済大国としての責任を果たすために、世界中から留学生を招いたり、こちらから外国へ教育

に出かけたりする機会が激増しよう。そうなると例えば何故日本が東洋の端の貧しい封建国家から、僅か100年の間に欧米と肩を並べる現代経済大国に発展できたかという疑問や、日本人の欧米の定義にあてはまらない道徳律や宗教観等を外国人の人達に説明せねばならなくなる。国際的に通用する言語と論理に基づいた教養や識見を養う事は、大学教育の国際化の極めて重要な課題となろう。

さてこの観点から見た現状はどうであろうか。私の見る限りでは、幅広い社会や国際関係への学生諸君の関心はないわけではないが、そうした勉強なり議論を積みかさねる場が今の大学には非常に少ないようだ。一昔前の学生の政治運動にこりた文部省なり大学が管理型の教育体制を強化した事であろうし、又学生にとっても情熱をかきたてられるような社会問題は見当たらない事でもあろう。それにしても日本の学生の学習態度は余りにも受動的であり、理解と記憶を重んじ、“how”を知ろうとはするが“why”という疑問をほとんど出さない。之は儒教的東洋的教育の本質に根ざしているかも知れぬ。欧米からの留学生達の観察も同じであり、学生が先生に絶体服従であり、若い自由な発想は未熟なものと片づけられ、先輩後輩の順序が一生ついてまわるといふ関係は彼等の理解の外にあるらしい。もう一つ私にとって気になるのは学生諸君の歴史や古典についての無関心である。戦前の欧州に範をとった大学での少数教育では古典が重視されたが、戦後の米国式の大量教育では実学が重んじられているという違いもあるのだろうが、世代の断絶をこのくらい感じさせられるものはない。

平和で豊かな経済大国に育った学生諸君にとって、大方の関心事がマイホーム、マイカーであるのは当然だと思うので、ここに書いたような話は多分“馬の耳に念仏”という事になろう。もし10人の内の1人でも私に共感なり反感なりを持って読んでくれるならば満足と思わねばなるまい。

技科大を去るにあたり雑感

第5（物質）工学系 教授

浅田 榮一



いま、9年前の4月、燦々たる太陽を浴びた白い建物が眩しかったことを思い出しています。季節の移り変わりを、デパートの広告とか、地下鉄やバスのポスターから知る大都会と違って、ここ雲

雀ヶ丘では陽射しの変化や高気圧の交替をしっかりと肌で感じることができます。

季節の交替と同じように、世代の交代をはだで感じることができるのは、大学のひとつの特徴ともいえましょう。否応もなく若い学生と終日接触し、息子に近い年齢の教官の方々と意見を調整してゆかねばなりません。

着任後すぐ大学院の講義がありました。第2時限・3時限（9時55分～12時35分）連続の講義です。教務担当の先生は、「一回目は休講でも良いでしょう。」とおっしゃいました。前の勤務は工技院化学技術研究所（旧称東工試）でしたから、講義の準備へのご配慮があったものと思います。でも、とにかくやることにして10時頃部屋の前までくると、中で電話がけたたましく鳴っています。受話器を取ると殆ど同時に今度は、いま閉めたばかりのドアを激しくノックする音がしました。ノックに「ハイ」と大きく返事して聞くと、電話からは、「今日は講義です。大学院の講義です！」という学生の声が大きく流れてきました。ドアを開けて入って来た学生は「先生！208号室に皆集まっています。」という講義の催促でした。ギョウテンしました。戦中、戦後にかけて大学（旧制）で過ごした私ですが、先生方は10分程度は十分遅れてこられるのが普通だったように思います。勿論当時の文通事情があつてのことでしょうけれど、ほとんど30分も遅れてこられた先生も珍らしくはありませんでした。立上りにパンチを喰らった感じでした。えらいことになったな……と思いました。この大学の空気にあわせて行くためにはヨホドしっかりしなければ……と思ったわけです。私が学生の頃は、「講義に頼ることなく自分で勉強すること」と先輩にいわれていました。私自身もそう感じていましたから、教師の立場が始まろうとする時

も、あまり講義の役割を高く考えていませんでした。

しかし、よく考えてみると、あまりやることのなかった戦争直後と違い、現代は目まぐるしく動いています。失なわれてゆく時間を別にしても、来るのかこないのかわからない教師を講義室で待ち続けることなど現代の学生には感覚的にできないことだと思いました。英・独・佛語の文献が読めて、一般基礎と専門の工学と研究方法の基礎を身に付けておけばあとの応用は自在のはずであるといった考えは、限られた人達だけが大学に学んだ頃に通用したことのようです。今は、技術エリートはかなりのディテールに亘って、人々に指示できることが要求されているようです。これに技術革新の速さが加わります。工学部は現代産業社会にむけて「機能化」しているともいえましょう。大学と学生が厳しい訓練を要求してくるのは当然のことと思うようになりました。

「時間的にもキチンとして、キチンとした訓練を受けて行きたい。」という学生の意思をまず最初に感じたわけです。Punctuality は現代の重要な徳性のひとつでありました。

図書館の出入口の横棒（バー）にも違和感を感じました。間違って本をカウンターでチェックしないで通るとブザーがなってバーが動かなくなるというやつです。「共同利用にむけて、本をあるべき処に置いておくことの大事さを学生に教えること」が教育なのではないかと思いました。ブザーが鳴るなんて……とも思いました。しかし、良く考えて見るとこの精神教育を誰がやるのかということになります。実はこのブザーが人々に「カウンターの手続き」の重要性を教えているのだということに思い当たりました。

大正末期生れの私の場合、振り返ってみて精神面での教育が強調されていたことを今更ながら感じております。他律より自律・潔白さ、犠牲などが強調されてきました。ですからそのこと自体は大事なことなのですが、一寸行き過ぎると考え方の異なる人との協調が阻まれる危険性があります。いまの世界で要求されているのは、考え方や思想がひとつになることなく、むしろ考え方の異なる人々がどうやって共存し

て行くかということでしょう。現実面、具体面で意見が一致し、機械的なルールができれば良いというわけです。

現代は、思っている以上にメカニカルです。私など、留守番電話に向ってよほどでないと話す気になれません。しかし、若い人達は抵抗なくこれで用事を済ませています。あるいは恋のささやきにも使っているかも知れません。

他にも、当初違和を感じた事柄が若干ありましたが、このように私の“コンパイラー”を使って、多少無器用でしたが、私なりの言語ですべてを理解できるようになりました。

昨今のニュースは、国内外の激動の前兆を知らせています。相変わらず世界は変化していくようです。ここでの貴重な経験を生かし、これらの変化に順応して、これからの生活を享受して行きたいと思っております。本学の教官生活は、ある意味ではつらいこともありましたが、今はすべてが懐かしく立ち去り難く、回りの風景など写真を取りまくっております。

最後に、技科大の今後の発展と皆様より一層のご建勝とご活躍をお祈り申し上げ、また多年に亘るご寛容とご厚意に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

求む 投稿・表紙！！

■ 投 稿

23字／行 横書き 厳守
 その他：内容・長さ等は問いません。写真も添えていただければ幸いです。
 随時、受け付けますので下記まで送付下さい。

〒441 豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1
 豊橋技術科学大学内
 同窓会事務局
 同窓会誌 編集係

■ 投稿を依頼した皆様へ

期限を過ぎても受け付けます。
 机の片隅で返信用封筒が泣いています。

■ 表 紙

写真、絵、グラフィックデザイン等何でもOK！

・サイズ：B5版程度に縮小、拡大可能なもの。

※CM的な要素のものを除く。

採用の場合は薄謝を送付致します。

※送付先：同左

「頼まれた原稿は 今すぐポストへ」

編集委員からのお願いです。

平成2年度

懐古雑感

第1(エネルギー)工学系教授

草鹿履一郎



15年程前、前職の新日鉄基礎研時代物理学会誌に「企業と物理屋」という雑文を書いた。そこに大学の先生への注文として1) 立派な教科書が沢山出ているが講義内容は独自のものにして欲しい。2) 学問発達の歴史経緯を話して欲しい。3) 自分の研究の経過

を学生に易しく紹介し続けて欲しい。4) 自分で考えることと協調の訓練をして欲しい。5) コンピューターとエレクトロニクスはテクニクとして覚えさせて欲しい。6) 卒業研究は完成しなくても良い。と勝手なことを書きつらねた。その時は2、3年後に私自身が大学の先生になろうとは夢にも思っていなかった。それから本学へ着任後鉄鋼協会の求めに応じて「会社の研究大学の研究」という随想を「鉄と鋼」誌に投稿したが、その時は「従来よりも基礎科学の素養を身につけた技術者を育てることに腐心している。」と結んだ。そして「物理学会誌」「鉄と鋼」に書いた様に自分なりに日夜努力したつもりであったが、今退官するに当って「言うは易く行は難し」「日暮れて道遠し」の古諺を沁々と身を感じている次第である。勿論、本学設立の趣旨にある通りの「より高度な実践的・創造的な能力を備えた指導的技術者」が本学から輩出されて行くことは今や疑いの無い事実になっているが、そのどこに「私の貢献」が入っているかを問われると全く恥ずかしい思いがしてならないのである。

私は昭和54年(1979)に本学に着任した。その前は卒業した大学で約8年間、次に理化学機器メーカーで約2年間、更に鉄鋼メーカーで約20年間勤めたが主として技術研究に従事して来た。そして本学での12年間を含めると約半世紀近くなる。此の期間は我が国の所謂「終戦後」と称せられる時期に始まり、日まぐるしく進歩する科学が技術の発展を促し、その技術が社会を大きく変革し、その社会が又科学や技術の進歩を促進して非常な勢いで世の変化をもたらして今日に

至っている時代に丁度相当する。終戦直後大学生の頃、闇市を横目で見て「あのホカホカの揚げ饅頭が一生のうちに自分の口に入る時が来るだろうか。」としばしば思い乍ら通学したのに今やどうであろうか。日本は世界有数の経済大国になり、世界有事の際には卒先して対処しなければならぬ程に変化した。武力が駄目なら金でやれ、国力が弱小だから何もしないでよいとは全く言っていて居れなくなった。此の約半世紀間の変化又は進歩は一体何によるものだろうか。何もしないで何となく変革が行なわれたということは有り得ない。日本に限って言えば昨日までの敵国アメリカの庇護、すぐれた指導者の時宜に適した判断、そして我々の先輩や同僚の努力、学生達を中心に言えばその祖父、祖母、父母達の苦勞によるものであったと言えよう。話しが少し大きくなり過ぎたので自分のことに話しを戻そう。私は大学のとき理学部物理学科で物理を少しばかり嗜った。もともと理工科系統の学科はあまり得意ではなかったが、物理の思想というか論理の進め方というかそれが大変気に入って少しばかり複雑な社会現象の説明にも適用出来るので悦に入ったものだ。この感じはしばらくの大学生活それからかなり長期間の企業人生活までも続いたものだが、本学へ就任して工学部教育という命題に向ったとき、はたと行詰ってしまった。詳細には言えないが、何か高い障壁にぶつかりその障壁をこんにちまて越すことが出来なかった様な気がする。特に此の大学は工学部単科大学であり「日本の大学工学部教育は危殆に瀕している。」といわれる様な周囲情勢のもとでは私などはどうしてよいのか迷い続ける有様であった。紙数が足りなくなってきたので、泣きごとを言わずに前向きな結論を急がねばならない。色々な前進的な施策は良いとして次の諸点は本学発足時の大構想として守り続けてもらいたい。即ち1) 高専卒を中心に考えること。2) 修士までの一貫教育ということの内容充実。3) 一貫教育の中での実務訓練の意義の位置付け。以上が大学工学部教育の歴史の大道を変えて行く柱になると思うので挙げた。

此の雑文を若い人達が時には思い出して前進の糧にして下されれば望外の喜びである。

退官にあたって

第2 (生産システム) 工学系 教授

伊藤 公 允



1977年春頃から本学への赴任の話がはじまって5月にはそれが決定的になった。それまでは大所帯であったせいか各一つの委員を割り当てられるだけで自分の研究、学生の研究指導に専念する、今から考えると優雅な大学生生活を過ごしていたが、それ以来大学創設のための色々な仕事加わって多忙な生活がはじまった。翌年4月に入ってくる3年次学生の入試の準備と実施、新構想大学としてのカリキュラムの相談がkey personと数人の教官予定者とで繰り返されたほかに建物(面積は決っているので内部の区割り、電気、水道、ガス設備)について板橋の極地研や文部省で工営課との話し合いが殆ど毎月のように繰り返され、最後に翌年春、1年次学生の入試をして助走期間が終わった。

初期には宿舎もなく名古屋から名鉄電車やマイカーで通勤し、数少ない教官で講義、学生実験、各種委員会に忙殺されていた。研究棟、実験棟が逐次竣工するにつれて引っ越しを重ね、教官数も年をおって増加し現状に至った。今では泥んこの道も駐車場の水溜りもなくなり整備が進行した。しかし多忙さに関してはあまり改善されたという感じがしていない。

大学教官の本務は教育と研究である。第2工学系で最初に定められたカリキュラムは種々雑多な経歴の学生にたいしてあれもこれもと並べ立て確かに大変な負荷であったが、初期の学生の意気込みもすさまじく、その選択科目まですべてをとろうとして挫折感に陥るものがでるほどであった。その後第1工学系のそれとの重なりを緩めて何度かの手直しをへて現在の形になった。できるだけ学生の心理的負担をへらして、あいた時間は自主的に勉強してもらおうという配慮からの筈であった。しかし学生の気質は年と共に次第に変化してきている。卒業に必要な単位数を確保するだけで満足して、自分で問題点を探し解決しようと努力するような学生がすくなくなってきた。大学の大衆化

という名のもとにまさに悪貨が良貨を駆逐する現象が進行しているように思えてならないのは残念である。名古屋でもここでも会社から派遣されてきた社会人の研究生とか修士学生を指導したが我々よりも年齢的に学生に近い彼らの研究意欲と行動は通常の学生に強力な刺激剤になっている。現状を見ていると研究室に2年に一人程度まで社会人入学をふやしてもよかったかもともおもえる。

何年か後に大学に冬の時代が訪れると言われている。大学の評価を決めるものさしとしては設備の充実も大切であるがそれとおなじくらい修士、博士課程学生の勉学の意欲とそれがはっきり反映する研究成果が大切であることはたしかである。学生にもっている能力をいっぱい伸ばさせるように、真剣に充実した大学生活をおくらせるように教導していただきたいと思います。終わりに皆様の御健康とご健闘をお祈り申し上げます。



豊橋技科大を去るにあたって

第4(情報)工学系 教授

河竹好一



大学を去るにあたって、2, 3の点を雑感として振り返って見る。

① 制御屋は広い視野での研究開発を。

まず日立で経験したことについて述べる。そもそも昭和30年代~40年代当時の日立研究所では日立茨城

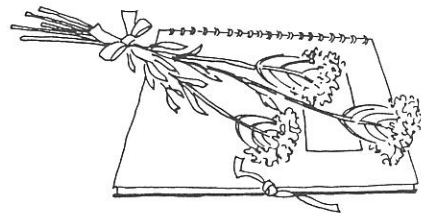
地区の重電機製品の技術的中心になり、先進欧米諸国の専門技術に追いつき追い越すことであった。幸い自分が担当した制御分野では欧米との差が少なく、比較的新天地を開きえた。ここでは特にエレベータ制御を取り上げてみる。これらにはまず基本制御(着床, 到着時間, 乗り心地)があり、更にこの上位に群管理制御がある。これは特に超高層ビルで用いられ、設備台数, 運転方式(パターン)に関与するものである。一般の多目的ビルに考えると多くの企業または事業所がそれぞれの階で店舗を開設し、一群のエレベータを共用している。このような場合, 出勤時, 平常運転時, 昼食時, 退勤時における利用状況(利用者の流れ)が異なる。そこで、それぞれの運転パターンをどのようにし、その運転パターンの識別をどうすればよいかなどを明らかにし、エレベータシステム全体の効率と価値を高めなければならない。これは制御屋の主要点であり、常に広い視野でシステムを考察する必要があるものと思われる。② 裏から眺めれば、真実も浮上。

次に本学における主なシステム工学的研究について述べる。その第1は人, 物などの流れに関するもの、第2はプロセス, プラントのLQI技法などに関するもの、第3は電力システムに関するもの、および第4はエキスパートシステムに関するものなどである。ここでは特に第1のテーマ中の地下街火災時における避難のシミュレーションを取りあげる。流れの場を有する非圧縮性流体の拡散方程式を解き、火煙の時間的な流れを求めたが、いまこの火煙の濃淡の密度を裏返して見ると、避難する人の動きに似ていること気付いた。そこで避難者の動きのモデルとして流れの場を有する圧

縮性流体の拡散方程式で提示すること、およびこれを用いて成果を挙げている。

③ 地球はかよわいもの。資源・環境・公害問題について

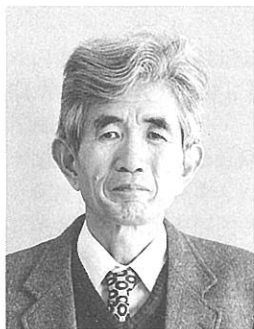
過去を振り返って見ると、欧米に大きく水をあけられた工学, 技術分野のハンデキャップを縮めるべく猛烈に力を注いで、現在我が国はGNP世界第2位までに繁栄している。ところが地球全体の環境・公害問題を眺めるときまったなしの状況までになっている。一方、資源問題の一つである石油について考察してみると、原油はエネルギーポテンシャルの高い資源(燃烧した原油の分子, 原子に触媒などとエネルギーを加え、何らかの方法で元の原油を作成できたとして、そのエネルギーの多いもの)であり、約100年で枯渇するとも云われていて、これを今の人々のみが使い切ってよいのであろうか。これら資源問題の基盤にして、環境・公害問題を全地球的視野から考えてみたいものである。



研究の自由の有難味

第5(物質)工学系 教授

高山 雄 二



私は第1次石油ショックの人員整理で昭和51年企業を退職、半年失業、約1年半コンサルタント業を行いながら自宅で研究を行った(その成果は着任後3報にまとめて発表)。問題は生活費は得ることができたが、放電が大きいことであった。そこで大学に拾って頂き53年着任した。俸給は同年代の方々に比べ格段と低く、我ながら惨目さを感じた。事務官は「資本金10億円以上の企業を退職して1年以内に着任してないから過去の経歴は考慮できない、1日復職して来なかったあなたの落度である」と。一般の民間人の常識からはなれた規則を振りまわされ、はじめて公務員の世界というものはこうゆうものかと思った。そこで私は安くてもよい、私は自由を買ったんだと自分自身に云いきかせた。企業に27年、黒字の基になっているいくつかを仕上げはきた。しかし自分の信念でやっていた研究ないし事業を中断もしくは追い出され大変残念な思いを味わって来た。今度は自由であるから、戸棚の肥になるような論文作りに終らず、工学部らしく任期の13年間に世の中に研究成果をいくつ還元できるかに挑戦することにした。それに楽しみを見出せれば俸給の低さは忘れることができると思った。

研究を行うには教官研究費ではとても不足、科研費を当てにはできないので、専ら企業からの委任経理金・資材で行うことにした。企業に在職時にゼネラルマネージャーとして営業にも手を出し、その折、物を売るよりもむしろ、個人の信用と安心を売ることを心掛けて来た。これが役立ち、委任経理金等の集めにはさほど苦労しなかった。

メインテーマをどう選ぶか、少しでも芽の出かっている先端的なものを扱ったのでは、企業の動員力、技術力にとっても抵抗できないことは企業の経験から明らかである。そこで数社以上の企業でかって研究され(すなわちニードは充分ある)、不成功であってその不

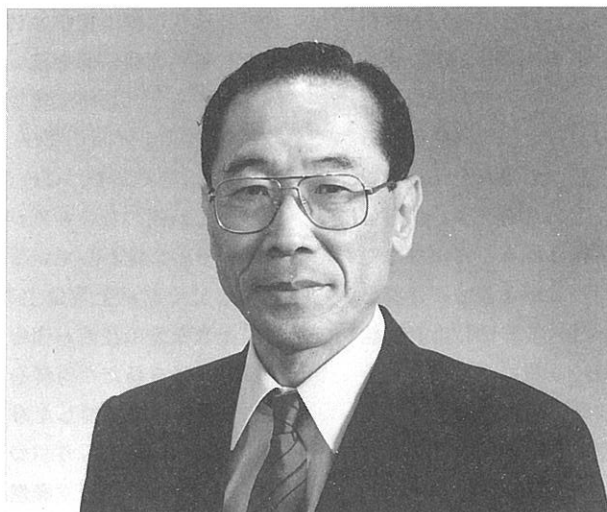
成功が常識化され、あきらめられてしまった材料或いはプロセスの再開発ないし見落されているニードに沿った材料の開発に的を絞った。始めてみると歯のたたぬものもあり、結局成功した研究は「着色性の良い低吸縮添加ポリマー」及び「カラム用メタルキャピラリー」の2つである。これらは何れも世間で評価を得、世界でも類例のないものが生めたという職人的満足感を今ひそかに味わっている。それらが成るに当っては協力してくれた企業は工業的な工夫、努力等を払って、それなりの技術も作ったので、それを評価して私の研究成果を新たな対価なしで渡した。特に後者は研究に9年の歳月を要したもので、研究の自由のたまものであった。他にもう一つ未完成の研究がある。それは「火災からの安全(難燃耐策ではない)アルミ対抗自動車用外装材料用樹脂」の開発である。3年は経過した現在、夢も画けるようになったが、焼き付け塗装合格までにはあと2年はかかる。ここで退官、全く心残りである。できることなら俸給は半減してもよいから、あと数年やめない自由はないものか。大手からの囑託の話のことわって、この研究の続行に執念を燃やしている。

大学に来てはじめて信念を通せる、梓にはめられない自由の有難味を満喫した。私からみると大学を出てそのまま教官の道に入られた先生方は、何と幸せな人生を過ごして居られる運の良い方々であろうか、そのような自覚をお持ちであろうか、六道輪廻を御存知かと羨しくなる次第である。

最後に一言、企業で工場の運営までやって来た私の目からみると、大学の研究室の安全への欠如、エネルギーの無駄使い、郷に入れば郷に従えて見て見ぬふりをして来たが、自由も安全とお金の上に成立っていることを思い出して欲しい。研究室の災害発生にひやひやした13年間であった。退官メリットはそのひやひやから開放されることにしか見出せない。この13年間の自由、恐らくこれから先の人生をも含めて最良の13年間を与えて下さった大学当局に厚く御礼を申し上げて退官の言葉としたい。

＝ 追 悼 ＝

生産システム工学系教授 湯川夏夫先生を悼む



生産システム工学系教授、湯川夏夫先生におかれましては、平成3年5月22日癌性腹膜炎のため逝去されました。享年61歳でありました。

湯川先生は、昭和54年に創設間もない本学生産システム工学系の教授に就任され、大学創設の困難な時期に本学の教育と研究の充実のため努力されるとともに、学生ならびに若手研究者の指導育成に情熱を傾けてこられました。先生の御専門は金属材料学で、卒業生の皆さんの中にも、あの難解な合金状態図の講義に頭を悩まされた記憶のある方が多いと思います。これからも母校の発展のため、ますますご尽力いただけるものと思っておりましたところ、突然の訃報に接し哀惜の念に耐えられません。先生の在りし日のご活躍、お人柄を偲びつつ、ここに謹んで哀悼の意を捧げて冥福をお祈り申し上げます。



同窓生がお世話になった事務官からのお言葉

雲雀ヶ丘の保健室より

学生課 福井博子

同窓会の皆さまお元気でしょうか。

54年に技科大の保健に携わってから早くも13年が過ぎました。

医療現場で不幸な転帰をたどる手遅れのケースに会い何度悔しい思いをしたことか。医療の発達はめざましく多くの病因が解明され治療技術が開発され長寿社会を迎えましたが発見が遅れては高度医療の恩恵に与れません。これからの医療は予防と早期発見による早期治療が大切と考えるようになり保健活動の場を大学に求めて54年本学にやって来ました。

病人ばかりの職場から移った新しい職場で明るく元気で潑刺とした学生に接することになって「健康な身体に健康な精神が宿る」ことを実感する日々が続く開店休業になるかも知れないと杞憂しました。

ところが5月の定期健康診断の結果、高血圧等の異常が多数発見され大学生は成人病予備群であることを知らされましたので事後処理、保健指導、ケガ等の応急処置やカウンセリング等の業務に追われる毎日が続き現在に至ります。最近では留学生が増加に伴い保健室も国際色豊かになり今日もイラクや中国、インドネシアからの留学生が来ました。先日インドのレタさんに赤ちゃんが誕生し「瑞美」と名付けられました。「瑞(みず)」は聖なるガンジス川の水から取ったそうで「医学を学ばせて、アジアの一人として誇りの持てる女性に育てたい」と夢を語られました。病氣と違い妊娠、出産、育児等の援助はとても楽しく日印のかけ橋、瑞美ちゃんの誕生を喜びました。

実は昨年末のガン検診で異常通知を受け取り精密検査のため手術台に昇ったのですが中止となるという顛末がありました。検査当日観念して手術台に上り息をひそめて待つ数分間、万一結果が凶と出たら、仕事や家庭の事エントリーしたテニスのキャンセルの手筈を考えると心中穏やかならず……手術衣の医師がいざ切除という段になり「……」と首をかしげた、X線写真を眺めつ透かしつ「??」たしかに2週間前の診察時に固

く触れた右胸のしこりがなかった。

ホルモンの仕業だったらしくたぶん乳腺症ですと言われてベットを降りここ数ヶ月のモヤモヤと緊張感から一気に解放され以前の脳天気に戻りました。

あわや“紺屋の白袴”的一幕でしたが改めて定期検診は“転ばぬ先の杖”と悟りました。

健康な学生さんの中からも時に重症疾患を発見します。昨年心臓の手術をしたN君や眼の手術を受けたT君は症状が出てからの発見では突然死や失明をまぬがれなかったという事で検診で発見された幸運を今ではとても喜んでます。若いから健康と過信するのは禁物で定期的な検診が重要です。

開学当時の雨が降ればぬかるんだキャンパスは整備され緑も少しずつ育ち春には桜の花が新入生を迎えることでしょう。待ち焦がれたプールも昨年6月に完成し夏の間水泳を楽しむ学生、教職員で賑わいました。4月からは知識情報の大学院が開設されます。

技科大祭や駅伝は恒例となり定着、先輩の意志を受け継ぎ新風を吹き込み13年の歴史を刻み技科大の伝統が創られてゆきます。一度母校をお訪ね下さい。

医療の最前線では今、専門性の追求で細分化され臓器単位に目がいきすぎ患う人間を置き去りにした機械化や重装備医療への反省が高まり「告知」「インフォームドコンセプト」等人間の良質生活をめざした取り組みが始ったばかり、医療最前線からは遠い保健室ですがアンテナをしっかりと張って「生命あってのものだねよ」「パンクは車を止めなきゃ走れませんよ」と良質生活求め地道な仕事を続けましょう。人の生命以上大切なものがあると思いませんか。

おしまいに雲雀ヶ丘より同窓会のみなさまへ「怒るためには65の筋肉、笑うためには25の筋肉を使う。どうぞ筋肉の酷使をする事のない日々の連続となりますよう」一層の御活躍をお祈りして

お元気で!

図書館へ寄ってください

図書課 三宅恒子

卒業生の皆様、お元気ですか?早いもので、一期生の方を送って10年がたちました。この10年は、本当に変動の激しい10年でした。これからも、一杯いろ

んなことが起りそうです。皆様が、それぞれの立場で、日本人も、世界の人々も、今も、10年先も心豊かに平和に生きていけるよう、その仕事の中で、力を尽

していただきたいと特に思うこのごろです。

技科大の図書館も、この7月によく蔵書が10万冊を超え、やっと基礎ができたというころです。

私が本学にきましたのは、開学後1年たった1979年ですが、そのころの天伯原を吹く風は、ものすごかったこと、道は泥だらけだったこと（寮から講義棟へ通う学生さんたちは、どんなに大変だったでしょう）を思い出します。「とんでもないところへ来たものだ」と思ったひとりです。図書館は、裏門を入れてすぐのA棟の3教室を利用して開いていました。仕事は、山のようにあり、何時終るとも知れないほどで、第三子が小学1年生に入学したばかりでもあり、「果たして仕事が続けられるかしら…」と不安な気持ちになったものです。それでも、大学の中は、活気に溢れていましたし、私も理工系単科大学の面白さに惹かれはじめました。1980年の4月にいよいよ図書館が竣工しました。ただ、くる日もくる日も、本運び、書架の整理で、図書館員は力がなければ生きていけない、と実感しました。当時の図書課長（岡部紀夫さん）は、「慣習にとらわれない、青年のような、生き生きした図書館をみんなで作りましょう」といわれ、何でも率先して動かれました。しんどいけれども充実感のある開館でした。開館当初は、カード式でしたので、カードに書いてもらいながら、いろいろ学生の方ともおしゃべりをしたことを思い出します。1983年からは、閲覧も電算化され、ID番号を「ピッ」とスキャンする丈で貸出が処理されるようになったので、カウンター当番は楽になりましたが、その反面学生の名前を覚えなくなりました。それでも、レファレンス・デスクに相談にきてくれる人とは、いろいろ話ができました。

私が付き合った学生の方は、図書館の夜間バイトの人たち、合唱同好会そしてテニス部の人が多いのですが、はじめの頃は、学生の数も少なく、テニス部の学生にテニス教室を開いてもらったり、山登りを一緒に

したり、技科大祭の（男性の）ミスコンテストの衣裳を貸したり、その化粧を手伝ったり、いろんな付き合いがありました。建設工学系の人たちとは、そのころから定期的にテニス大会をはじめ、今も続いています。

卒業生の方が、図書館を尋ねてくださると、とてもうれしいものです。その上、その人たちが、今現在をいきいきと語ってくれる時には、自分のことのように本当にうれしくなりますし、また、一日みた丈で急に大きくなられたと感じることもあります。今後とも実社会にあって、常に目を広く、大きくあけ、目的をもって、しかも人間らしく生きてほしいものだと思います。長い時間のスパンでものを考え、そのために今何ができるかを考えてほしいと思います。よく話題になるのですが、環境問題にしても、自分たちの子孫に、美しい自然を返すという意志が必要なのではないでしょうか。技科大の卒業生がそれぞれの持場で、このことに寄与して下さったならどんなによいことでしょう。

私たち図書館職員は、図書の管理や、図書の貸出だけでなく、図書館を利用してくださるすべての方と人間としてのよい関係を持ち、教えあい、教えられあい、助けあいながら仕事をしたいものだと思います。卒業の後でも、人間的な付き合いが継続されれば、なおすばらしいと思います。技科大の図書館には、いろんなふれあいがあつたなあーなんていう思い出があつたり、ふと何かの時、図書館を思い出すと懐しくなる、そんな図書館でありたい、と願っています。いつでも尋ねてください。すして、ひとこと声をかけてください。

皆様のご活躍を祈っています。

——久々に訪なひくれし卒業生の

ことばの端に自信のあふれる——

課外活動雑報

第40回東海地区国立大学体育大会が6月29日、30日、7月6日、7日の4日間に亘り静岡大学で開かれた。当日は学生生活委員長の4系田所教授をはじめ学生生活委員の先生、8系の安田先生、学生課の職員が激励と応援にかけつけた。総合成績は、前年同様第8位34.5点であった。浜医大が41.5点でその差は7点、来年度は逆転、うまく行けば5位までと期待している。

私の観戦記では、各種目とも僅差で負けているから、あと少しの頑張りで見るのは甘いかも知れないが、卓球の6位も優勝した静大とはセットオールの接戦であり、硬式庭球は、優勝した浜医大との対戦では

途中までゲームは勝っていたが服装が規定外のため負けになったとか、ハンドボールも敗者復活戦でトップになるぐらいだから組み合わせ次第では上位へ、硬式野球についても1回戦岐大と6回まで4:0と優位に試合を進めていたので我々も安心して他の種目の応援に行った後、スタミナ不足か、応援不足か逆転負けをした。東国体の各種目の成績は別表のとおりである。

東国体の成績は、今ひとつであったが良いニュースもある。硬式野球部は、今春リーグ4部から3部に昇格し、地元日刊スポーツに「燃える豊橋技科大野球部」なんて見出しで掲載され、秋のリーグ戦を頑張ってい

る。陸上競技でも春の東海学生陸上競技対校選手権大会で4系B3井口晃敏君(奈良高専)が走り高跳び(2.00m)で優勝。同君は2.14mの記録保持者で全国レベルの所にある。

先日、第1回全日本大学トライアスロン選手権が浜名湖競艇場周辺コースで開かれ、本学から3人が出場、174校500余人中個人総合で5系M1佐藤正広君11位、同佐野嘉信君50位、7系B3卯津江穂君148位、大学対校(3人の合計点)では上位が、1位日大、2位慶応大、3位日体大というなかで、本学の11位は賞賛に値する。

文化系クラブも、天文部、軽音楽、豊橋日曜学校の地味な活動等が日に付く。吹奏楽団は、9月23日秋分

の日に第7回定期演奏会を豊橋勤労福祉会館大ホールで開いた。近年にないまとまりと質の向上という話で、第3部の「1812 Overture, Op.49」(指揮 田辺秀治)はなかなか好評であった。

大学も、課外活動活性化の一助となればと、体育系クラブリーダーズ研修が1月19日、20日飛騨高山乗鞍青年の家で行った。初めての試みであったが、大へん評判がよく、今年度は1月5日から2泊3日の行程で文化系クラブも加え行うことにしている。

本学の課外活動は活発とは言えない。研究勉強が一番であろうが、課外活動にも多くの学生が参加し青春を謳歌してほしいと希うこの頃である。

第40回東海地区国立大学体育大会成績一覧表

番号	種目	順位	優勝	準優勝	第3位	第4位	第5位	第6位	第7位	第8位	備考
1	陸上競技	男	岐大 10	名大 8	静大 6	三重大 5	愛教大 4	豊技大 3	名工大 2	浜医大 1	
		女	静大 5	愛教大 4	岐大 3	名大 2	三重大 1				
2	水泳	男	名大 10	三重大 8	静大 6	岐大 5	愛教大 4	浜医大 3	名工大 2	豊技大 1	
		女	愛教大 8	三重大 6	名大 5	静大 4	岐大 3	浜医大 2	名工大 1		
3	硬式野球		名大 8	名工大 6	(岐大 4.5, 三重大 4.5)	(静大 2, 豊技大 2, 愛教大 2)					
4	準硬式野球		—	—	—	—	—	—	—	—	雨天中止
5	硬式庭球	男	浜医大 8	静大 6	名工大 5	岐大 4	(三重大 2, 愛教大 2, 豊技大 2)				
		女	静大 8	愛教大 6	岐大 5	名大 4	(浜医大 2, 名工大 2, 三重大 2)				
6	軟式庭球	男	静大 10	愛教大 8	名大 6	岐大 5	名工大 4	豊技大 3	三重大 2	浜医大 1	
		女	岐大 5	静大 4	名大 3	三重大 2	愛教大 1				
7	バスケットボール	男	名大 8	静大 6	三重大 5	愛教大 4	岐大 3	名工大 2	豊技大 1		
		女	三重大 5	静大 4	愛教大 3	名大 2	岐大 1				
8	バレーボール	男	愛教大 10	岐大 8	浜医大 6	静大 5	名大 4	豊技大 3	三重大 2	名工大 1	
		女	愛教大 5	岐大 4	静大 3	名大 2	三重大 1				
9	卓球	男	静大 10	名大 8	岐大 6	名工大 5	愛教大 4	豊技大 3	三重大 2	浜医大 1	
		女	岐大 5	愛教大 4	静大 3	名大 2	三重大 1				
10	バドミントン	男	名大 10	静大 8	三重大 6	岐大 5	名工大 4	愛教大 3	浜医大 2	豊技大 1	
		女	名大 8	三重大 6	岐大 5	静大 4	愛教大 3	名工大 2	浜医大 1		
11	サッカー		静大 10	名大 8	愛教大 6	名工大 5	三重大 4	浜医大 3	岐大 2	豊技大 1	
12	ハンドボール	男	名大 10	愛教大 8	静大 6	三重大 5	豊技大 4	名工大 3	岐大 2	浜医大 1	
		女	愛教大 4	三重大 3	静大 2	岐大 1					
13	柔道		名大 8	静大 6	(愛教大 3, 豊技大 3, 三重大 3, 岐大 3, 名工大 3)						
14	剣道	男	岐大 10	名工大 8	静大 6	三重大 5	(名大 2.5, 愛教大 2.5, 豊技大 2.5, 浜医大 2.5)				
		女	愛教大 6	岐大 5	静大 4	名大 3	(浜医大 1.5, 三重大 1.5)				
15	体操	男	名大 6	静大 5	名工大 4	愛教大 3	岐大 2	三重大 1			
		女	(愛教大, 岐大, 静大)								オープン
16	馬術		静大 6	名大 5	(愛教大 2.5, 三重大 2.5, 岐大 2.5, 名工大 2.5)						
17	空手道		浜医大 10	愛教大 8	岐大 6	静大 5	名大 4	名工大 3	三重大 2	豊技大 1	
18	弓道	男	名工大 8	名大 6	(浜医大 3, 静大 3, 三重大 3, 岐大 3, 愛教大 3)						
		女	静大 6	名大 5	愛教大 4	岐大 3	三重大 2	浜医大 1			
19	アーチェリー	男	(愛教大, 三重大, 岐大, 静大)								オープン
		女	三重大 4	愛教大 3	静大 2	岐大 1					
20	少林寺拳法		名大 8	三重大 6	愛教大 5	豊技大 4	岐大 3	静大 2	名工大 1		
総合順位		男	名大 119.5	静大 108	岐大 84	愛教大 82	名工大 68.5	三重大 68	浜医大 41.5	豊技大 34.5	
		女	愛教大 51	静大 49	岐大 41	名大 36	三重大 34.5	浜医大 7.5	名工大 5		

(備考) 表中の大学名の右数字は得点を示す。

研究室だより

「沖津研から畔上研へ」

総合エネルギー工学専攻 2年

高見 昭 康

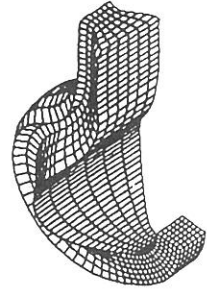
今年度新しく1系にできた畔上研究室を紹介します。我が研究室は、昨年度まで材料動特性研究室と呼ばれ、1系系長であった沖津先生が研究・指導してこられました。しかし今年度から先生が岐阜高専の校長先生として赴任されることとなったため、これまで沖津先生と共に研究・指導してこられた畔上先生が研究室を引き継ぐこととなりました。それにともない研究室の名称も計算力学研究室へ変更する運びとなりました。

本研究室を1人で引き受けることになった畔上先生はというと、最適設計の分野で最も新しい理論である均質化法を研究するために、11月からおよそ1年間にわたって、アメリカのミシガン大学へ文部省在外研究員として行かれることが決まり、本研究室も時代の最先端を行く研究課題がまた一つ増えることになりました。

研究室の構成は、昨年度1系最大の18人いたのですが、指導教官が1人となったため、今では11人と寂しくなっていました。そのため、研究もこれまで、低層での実験グループとD棟実験室での解析グループとで、半々に別れていたのですが、今年度の実験グループは、わずか2人となりました。その反面、研究のほとんどが解析中心となり、来年度以降は実験グループの存続も事実危ぶまれています。

研究内容についても説明しておきたいと思います。研究は、連続体形状の最適化を行う成長ひずみ法と、構造物体中の振動エネルギーの伝播を把握することのできる振動インテンシティの計測及び構造物の動的問題を解析する実験モード解析を行っています。成長ひずみ法は、木や骨の構成材料が自律的に増殖と吸収を行いながら力学的に適応した形状を作りだしていることをヒントにして考え出されました。成長ひずみ法ではその増殖と吸収を連続体内での体積ひずみの発生によって実現されます。図は汎用FEMプログラムを利用して解析されたフックの形状です。これは我が研究室のシンボルマークとなっています。

畔上先生の渡米まで後わずかとなってしまいました。研究室では例年より更に早く皆必死に研究に取り組んでいるように思います。自分は研究室のまとめ役として研究、後輩の指導に頑張りたいと思います。まとまりのない話となってしまいましたが、最後に卒業生の皆様ならびに長い間お世話になった沖津先生のいっそうのご健康とご活躍をお祈りいたします。



沖津先生最終講義（平成3年2月）



畔上研夏合宿

「はい、藤井研究室ですが…」

山 口 一 弘

われらの研究室、「藤井研究室」は居室と実験室が一体となっています。部屋では一年中、真空ポンプの音が鳴り響き、夏には装置から発生する熱で異常に暑くなります（部屋に冷房は付いていない）。冬にはこれらの装置が暖房器具になると思われるかもしれませんが、そのようなことは全くなく、ストーブ周辺の人口密度が急増します。また研究室は1階にあるため、よく動物が出入りします。例えば学内の捨て猫が入ってきたり、ドアをあけると蛇がいたりします。秋になると机の下から美しいスズムシの音が聞こえますが、何匹も泣き出すと真空ポンプの音と同様に不快となります。せめて研究室の前の庭だけはきれいにして安らぎの場を作ろうと、一昨年前に雑草を抜いて小さな花壇を作りました（変な研究室でしょう！）。アサガオ、ユウガオなどの花に加えて、とうもろこし、にんじんなども植えたので花壇と言うよりも農園でしょうか。しかしアサガオ・ユウガオはつるばかり伸びて花をなかなか咲かせず、日当りの悪さ、土壌の悪さから作物はうまく育たず、挙句の果てには台風のために農園は壊滅状態となってしまいました。現在農園には雑草だけがすくすくと育っています。こんな快適な環境に藤井先生を含めて現在13人が机を置いて研究をしています。

研究室のメンバーは実に個性的です。物まねの上手な奴（先生の物まねはほとんどのメンバーができる）、装置よりうるさい奴、相手に話をふっておきながら突っ込ませない奴など、一癖も二癖もある連中が集まっています。こんな連中ですから研究室ではいつも笑いが絶えません。昼食は先生も一緒に学生食堂で食べられます。食堂が近い特権を利用して混雑を避けるために開始時刻の11時30分に合わせたように食堂に行きます。とにかくチームワーク万全です。

どこの研究室にも恒例行事が付きものです。われらの研究室においても例外ではありません。新メンバー歓迎遠足、追い出し旅行は勿論のこと、このほかにも幾つかの重要なイベントが行われています。夏の海水浴はその一つです。毎年誰かが犠牲となり、砂の中に埋められ、ヘルメット着用の上、お腹の上でスイカ割りをします。夏に先生宅で催されるバーベキュー会も重要です。先生宅でステーキやお酒をご馳走になりま

す。会が始まると最初の30分間、学生は沈黙し食べることに必死になります。ここぞという時の集中力は大したもの。それから先生の誕生パーティーも重要なイベントです。学生はパーティ用に借りた部屋に飾り付けし、料理を用意します。一方、先生は朝から何かそわそわしています。数年前に誕生日と日曜日が重なってしまい、その日にパーティを行えなかったことがありました。先生は「今年はやらしてもらえない」と奥さんに嘆いたそうです。子供みたいに。学生にとってもう一つ重要なイベントにスキー旅行があります。年末に行われるこの旅行は既に夏から企画され、秋には学会・研究会で忙しいのにも拘らずスキーの話に盛り上がっています。

研究は、と最後にやや真面目な話をしておきましょう。藤井研は材料開発を主とし、どちらかといえば泥くさい研究を行っています。先生のおかげで一研究室としては実験装置に恵まれ、メンバーはそれぞれにテーマを持って研究に励んでいます。その甲斐あって我々の研究は国内外で注目されています。先生は人が右に注目しているときに左を見ろといいます。あえて人がやらないことをやるところに面白いものがあるといいます。生意気事を言うようですが最近その面白さが私にもやっとなり始めたような気がします。藤井研の卒業生は30人を越えています。皆個性的で、すばらしい人たちです。先生は「学生は研究室独特の色に染って出て行く」と言われます。私は現在何色でしょうか。

(H. 3. 8. 20)



春の遠足にて (H2. 4)

「ものづくりと機能そして反応」

物質工学系 教授 伊藤健児

人類は天の恵みで地球上に存在していた物質の多様な機能を引き出し、利用することで文明を発展させた。しかし人類の機能に対する欲望は止まるところを知らず、それを満たすために天然物質の機能をはるかに超越する新物質を続々と生み出して来た。今世紀における科学技術の飛躍的な発展は、新たに創造された物質群に支えられて来た。しかし「ものづくり」をする科学者は、決して自分の作り上げた新物質のもつ多様な機能すべてに十分配慮している訳ではない。それゆえに、「宝の持ち腐れ」となっている物質が合成にかかわる研究室にはきわめて多く埋もれているのが実態である。これらに光の与えるには、機能（生理活性、電気物性、機械的特性など）を測定する科学者との密接な協力関係が必要不可欠である。しかも筆者のような有機化学・有機金属化学の領域で研究している科学者は、歴史的に「分子レベル」の物質の合成・反応を標的として仕事を進めているために、機能発現に重要な「集合体レベル」の物性の測定をないがしろにする傾向があった。この点では、始めから「分子」の概念が希薄で直接「集合体」から出発している無機化学分野の研究領域から、ここ数年来注目されて来た超伝（電）導物質が誕生したことは当然であった。有機分子集合体、ないしその基礎となる「分子認識」の機構解明が近年急速に発展しつつあり、最近では液晶物質に代表される有機分子の物性がさかんに利用されるようになり、ついには分子集合体を構築するにあたって、不斉炭素中心が一方の対掌体のみで構成される光学活性物質が求められるようになった。また古くから機能発現とものづくりが比較的つよい結び付きがあった医薬品などの生理活性物質についても、催奇性などの問題点が挙げられて以来、光学活性体として供給されることが求められている。

われわれの研究チームにおいても、光学活性の高選択的合成法に関与する研究課題と取り組んでいる学生さんも少なくない。目標としては、ごく少量の光学活性物質の分子認識能を触媒として用い、大量の光学活性物質を合成することができる、不斉増殖をとまなう触媒的不斉合法の手法を開発することにある。現在の

ところ、還元反応としては、90%をこえる高い光学収率と化学収率が達成できた段階に到達している。鍵となるのは、触媒中心となる遷移元素と結合する天然物から由来する不斉中心をいかに配位子として配置するにかかっていた。しかも触媒反応として効率良く変換反応が進行するためには、多段階の基礎的な有機反応をいかに一種の「システム」として組み立てるかも重要な課題となる。このことは生体内の酵素の仕組みに類似しており、われわれはエンザイムが蛋白質のような高分子の複雑な仕掛けを用いて触媒作用を発現しているかわりに、はるかに簡単な構造をもち、しかも構造変化が容易にできる「分子レベル」の仕掛けによる分子認識を利用した。キザな言い方を許して頂くならば金属を反応中心とする効率的「シンザイム」による物質変換プロセスが、均一系錯体触媒反応である。

その他の研究室のプロジェクトとして、金属中心への分子の接近を一方方向に規制するため、平面分子で壁をつくり、空いた面を効率的に反応場として利用するカチオン性ルテニウム触媒を用いる高選択的な炭素—炭素結合形成、機能材料として注目される有機ケイ素化合物の合成手段として重要な触媒的ヒドロシリル化反応における新局面への展開、複数の遷移金属中心をもつ縮合芳香族化合物を含むクラスター分子の合成・構造・機能についての研究、新規有機ケイ素化合物によるシリカゲル表面の修飾と分離機能との関係（神野・平田研との共同研究）が進められている。

大学も創立されて13年になる。研究室出身の同窓生諸君から見ると随分仕事も変わったと感じられるかも知れない。しかしいずれの研究課題も何年かつづけて来た仕事から発展的にスタートしたものがほとんどである。これまで西山助教授、永島講師といったすばらしい共同研究者と、実験が好きで情熱をもって仕事をしてくれた研究室の卒業生、在学生の一部のお蔭で楽しく豊橋で研究できたことに感謝している。おわりにあたり、同窓生諸君が今後もたゆまぬ研鑽をつまね、諸君達の世紀となる来たるべき21世紀の科学技術に斬新な視点を導入されるよう祈っている。

「神経情報研」

松本宣子

研究室はどこの皆、こんなふうにはまったのであろうか。毎日「準備」に明け暮れているといった感じであった。もちろんその「準備」には、実験装置のようなもの—この大学の好む言い方をすれば、“ハード”—もあるが、学生側からしてみれば、知識—“ソフト”—の方がメインである。しかもそれは、実験そのものに直接関係しているものだけでなく、その周辺知識も含まれる。先生はそれを『『考える』ための勉強』『『考える』練習』であるとおっしゃる。新しく何かを買おうというときに、先にそのマニュアルだけを読んで、覚えてしまっておこうということでは、決してない。その“もの”を操作できればよい、理解できずとも、とにかく動けばよいというものではないからである。というのも私達が扱う“もの”とは、動物(ニホンザル)だからである。

本学では、こういう動物による実験を研究内容の主たるものとしている研究室は、他にないときいている。そのための動物倫理委員会の設置など、学校側としての「準備」もされている。我々は新しい研究室が着々と作られていく、まさしくその渦中にいるといえる。そんな騒動を知る由もなく、9月20日ニホンザルが実験棟に入った。

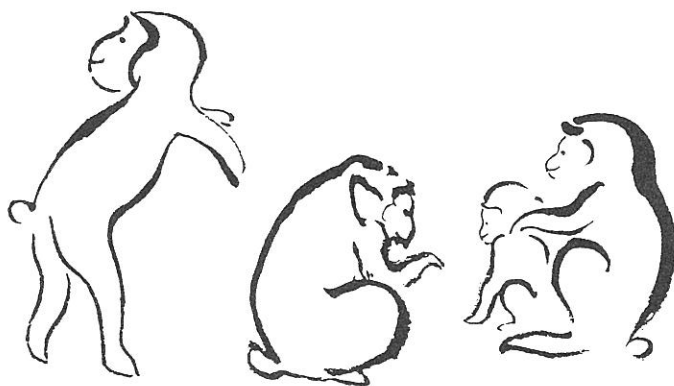
これまでの「第1段階の準備」中、研究室一同、動物を使わない実験を進めながらも、それぞれ考えるところがあったと思う。私事ではあるが、かつてバレーボールに夢中になっていた頃に公式試合で負けた際「練習のための練習をするな」と、指導者に言われたの

を思い出した。練習が“目的”になってはいないか、という問い正しだったように思う。少し違うかもしれないが、動物実験も同じではないかと考えた。実験のための実験になってしまわないか、他に目的があるはずであるのに、動物で実験を行うこと自体にのみ、重点がおかれてしまうのではないだろうか、と……。

「動物は、決め手にしか使わない」

日々、先生から言われていることである。動物実験と聞いて、「かわいそう」だと思ふ人が大多数であろう。現に、私自身「人間のエゴだ」とさえ思っていた。しかし、その研究室に集まった面々はといえばおおよそ殺生とはほど遠いような人物ばかりである。実験は実験として割り切って、動物に情が移らないようになど考えるのではなく、むしろ共同研究者としてめいばいい愛情を注いでいるようである。(サルを猫かわいがりとは変な話であるが……。)人一倍涙もろくて、情に厚い連中ばかりである。もちろん先生も御多分にもれない。

現在、「準備」は第2段階へと進み、実験に関係のあることも勉強し始めた。研究室もやっと研究室らしくなってきた。しかしまだまだ、いろいろなシステムを作っていかなければならない状態である。全く面倒な話ではあるが、逆に、そういう時に居合わすことができる人も数少ないと思えば、楽しいことかもしれない。いずれにせよ、エンドレスの「準備」の最中、サルは今日も元気である。



豊橋技術科学大学同窓会報表紙CGコンテストのご案内

1. 目 的

豊橋技術科学同窓会（以下、「同窓会」と記す）では、会員との連絡誌として同窓会報を発行してきました。今回この会報の表紙を飾るにふさわしいコンピュータグラフィックスアートを募集します。この中の優秀作品は今後発行予定の同窓会報の表紙として採用し、長くその榮譽をたたえます。

2. 応募規定

以下にコンテストの応募規定を示します。

応募資格：本学に関係する方ならどなたでも（学生，教職員，OB，OG，教務補佐，研究補佐の方等々。もちろん，その家族の方もOK）応募できます。

応募作品：コンピュータグラフィックスを利用して描画されたもので未発表のオリジナル作品に限ります。応募作品はできるだけ鮮明なハードコピーイメージで提出してください。（必要に応じてイメージファイルでの提出もお願いすることもあります。）なお，作品の大きさ，色（モノクロ，カラー）などは問いません。また，作品の内容については特に規定はありませんが，「技術科学大学」にふさわしいものをお願いします。作品の題名及び内容についてのコメント，利用したコンピュータやグラフィックス装置などの技術データも添付してください。（応募された作品は返却しません。作品に対する著作権は同窓会に帰属することになります。）

応募方法：製作者，応募者氏名，作品名，作品に対するコメント，および利用したコンピュータやグラフィック装置等の技術データを添えて，次の住所宛にお送り下さい。（同窓会表紙CGコンテストと朱書きしてください。）

〒441 豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1
情報工学系

奥山 徹

応募期間：平成4年4月1日～平成4年8月31日（当日消印有効）

（なお，在学生等につきましては，平成4年の6月～8月にかけて公募する予定です。）

賞金及び賞品：会長賞 金5万円

特 選 金3万円

入 選 金1万円

佳 作 金5千円

参加者全員に参加賞進呈，入賞者には同時に賞状を授与します。

発表：入賞者には直接通知します。また，同窓会報誌上にて発表致します。（参加者全員に該当する同窓会報を送付します。）

なお，上位入賞者の作品は平成4年度以降，実際に同窓会報の表紙として使わせていただきます。

表彰式：技科大祭の間に行う予定です。

同窓会事務局より会員の皆様へ

ご挨拶

豊橋技術科学大学同窓会会長

B83316 西 澤 一

先日間違い電話がありました。電話番号の押し間違いではなく、学生時代の同級生からのものです。当方の電話に対するリターンコールにて、“何だったかね？”が、先方の第一声でした。こちらに、覚えはないものの、久しぶりに聞いた懐かしい声に、つつい、長話をしています。相手の姿が見えないのも、この場合、好都合。少年時代のままの相手を、勝手にイメージしています。“変だなあ、誰か、別の奴からだったのかなあ”で、電話を終えました。こんな会話をささえているのも、同窓会の役割かなあと、感じた次第。

会報第7号をお届けしてから、2年弱の年月がたっており、会員の皆様の中には、“同窓会はどうなったんかいな？”と心配して下さった方も見えると思います。会報発行の遅れは、私を筆頭に、担当役員の方(体力もしくは精神力)の不足によるものにて、この場をお借りしてお詫びいたします。

但し、この間も、活動の根幹である会員名簿の更新、

改良業務は、事務局の江崎先生を中心に着実に遂行されておりますので、ご安心ください。更に、近年、役員会には、技科大出身の若い先生方が、続々と参加くださり、メンバーも充実してきました。博士課程設置のおかげで、卒業後、大学に残って研究を続けられる方が、増えてきたことが幸いしています。本年度では、この若い先生方が、役員会の過半数以上を占め、実質的な活動主体になっています。同窓会活動も本年度10年目を迎えた今、長年の懸案であった、役員会活動の安定化も達成できそうにて、私も胸をなでおろしています。

今後も、着実な活動を続けて行く考えですので、会員の皆様も、住所変更の連絡、会費の納入等にご協力下さるようお願い申し上げます。また、同窓会活動に関するご希望、提案、会報への投稿は常時受け付けておりますので、事務局までお送り下さい。

■同窓会事業報告 (平成元年度から平成3年度)

1. 会員名簿第2号の発行

当初の発行予定期日をおよそ1年余り遅れたが、平成2月10日、無事第2号会員名簿の発行にこぎつけた。今回の名簿作成は、できる限り費用を低減することに努力した。名簿の作成家庭で最もコストアップの要因となっている写植機の使用をやめ、レーザープリンターを利用した出力をそのまま版下とし、オフセット印刷により作成した。このため、配布価格2,000円と安価に抑えることができた。

また、今回の名簿では、索引として(1)全卒業生、修了生の五十音順索引、(2)各系別五十音索引、(3)出身校別索引、(4)研究室別索引、(5)会員氏名一会員番号対応表などを載せることにより、利用の便を計

った。

2. 会報の発行実績

平成元年度：7号、平成元年12月15日発行

平成2年度：未発行

平成3年度：8, 9号、平成3年12月中旬発行予定
(本号)

これまで会報は昭和59年度を除いて毎年発行の実績を残してきたが、ついに平成2年度は2度目の未発行年となってしまった。これは、編集担当役員の数(実質1名でほとんどこなしていた)が不足していたこと、同窓会役員間の連絡・協力が不充分であったことに原因があると思われる。同窓会役員会では、この事実を厳粛に受けとめ、反省するとともにただちに役員会を開き、編集担当スタッフの補充、充実を計った。その結果、平成2年度分に集めた原稿も含め、内容もさらに充実したものを8, 9合併号として発行するこ

とした。

3. 名簿、会報への広告募集

会報、名簿への広告募集を積極的にすすめることにより、会員の負担を減らす（例えば、名簿の無料配布）ことを目的とした。担当役員により、およそ200件あまりの大手企業に広告掲載案内のダイレクトメールを送った。これに対し、レスポンスのあった企業は1件だけで、当初の予想を大きく下回った。本学の知名度がまだ低いことも一つの原因であると考えられるが、今後もねばり強い努力を続けてゆく必要がある。また、募集方法の見直しも必要であると思われる。

4. 卒業記念パーティーの後援

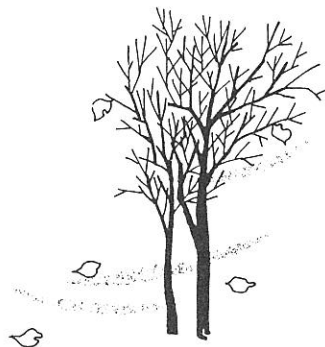
新会員の同窓会活動への理解を深めてもらうことを目的に、在学生で構成される学友会が主催する卒業記念パーティーに毎年資金援助している。平成元、2年度は実施済、3年度も実施予定である。

5. 会計システムの整理（実施中）

現在、入会金未納会員、年会費未納会員には基本的に会報、名簿の発送は停止することになっている。しかしながら、現在の会計システムでは、入会会員、年会費納入会員の識別が難しく、会員からの年会費納入状況の問合せにも即座に答えられない状況にある。このため、平成2年度より、名簿管理プログラムを改良し、入会および会費納入に関する情報もデータベース化する作業が進められている。

6. 平成元年度から平成3年度同窓会役員の構成

名誉会長	佐々木 愼一	学長
顧問	埜 克己	1系助教授
	梅本 実	2系助教授
	水野 彰	技開セ助教授
	奥山 徹	4系講師
	小松 弘晶	5系教授
	河邑 眞	6系助教授
	船津 公人	7系講師
	尾崎 一志	8系助教授
会 長	西澤 一	(3系2期)
副 会 長	鈴木 伸治	(6系3期)
副 会 長	安藤 智明	(6系4期)
事務局長	江崎 尚和	(2系1期)
事 務 局	奥山 徹	(5系1期)
	高橋 岳之	(4系4期)
	山本 幹雄	(4系5期)
	水嶋 生智	(5系5期)
	橋爪 進	(2系7期)
監 事	西野 達也	(2系3期)
会計担当	鈴木 伸治	(兼任)
	奥田 隆史	(4系6期)
	神山 斉己	(4系7期)
	石井 宏幸	(4系10期)
編集担当	安藤 智明	(兼任)
	川口 正剛	(5系6期)
	佐藤 裕久	(5系7期)
企画担当	近藤 秀範	(2系5期)



* 年会費納入のお知らせ *

会則改正に従い、下記のように年会費の納入の開始しておりますので、御協力下さいますようお願い申し上げます。尚、当年度内に会費納入無き場合は未納会員として登録され、以後会報、名簿等の発送は会費納入まで停止いたします。

納入方法 …以下のいずれかの方法でお願いします。

①銀行等の金融機関により下記まで御振込下さい。

（住友銀行 豊橋支店 普通預金 口座番号368127
豊橋技術科学大学同窓会
豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1 豊橋技術科学大学内

同封の振込用紙により住友銀行支店にて御振込の場合は振込手数料は不要です。(手数料は本会負担)

他の金融機関にて御振込の場合は振込手数料は振込本人の負担となってしまいますので予め御了承下さい。

②郵便局にて下記まで御振込下さい。用紙は郵便局備

え付けの払込通知票を使用して下さい。

この場合も払込料金は加入者(本会)の負担となります。

（口座番号 名古屋6-17220
加入者名 豊橋技術科学大学同窓会

いずれの場合にも振込人の氏名の欄あるいは通信欄に会員番号も記入して下さい。

※会計の事務処理上、1992年3月末日までに振込をお願い致します。

同窓会年会費納入額は、下表を参考をお願いします。

卒業・修了年	昭和62年度 (1987年)	昭和63年度 (1988年)	平成元年度 (1989年)	平成2年度 (1990年)	平成3年度 (1991年)	平成4年度 (1992年)
昭55年3月卒業 昭56年3月卒業 昭57年3月修了 昭57年3月卒業	1700円	1000円	1000円	1000円	1000円	1000円
昭58年3月修了 昭58年3月卒業	900円	1000円	1000円	1000円	1000円	1000円
昭59年3月修了 昭59年3月卒業	既納(入会時)	1500円	1000円	1000円	1000円	1000円
昭60年3月修了 昭60年3月卒業	既納(入会時)	1500円	1000円	1000円	1000円	1000円
昭61年3月修了 昭61年3月卒業	既納(入会時)	900円	1000円	1000円	1000円	1000円
昭62年3月修了 昭62年3月卒業	既納(入会時)	既納(入会時)	1000円	1000円	1000円	1000円
昭63年3月修了 昭63年3月卒業	在学中	既納(入会時)	既納(入会時)	1000円	1000円	1000円
平元年3月修了 平元年3月卒業	在学中	在学中	既納(入会時)	既納(入会時)	1000円	1000円
平2年3月修了 平2年3月卒業	在学中	在学中	在学中	既納(入会時)	既納(入会時)	1000円
平3年3月修了 平3年3月卒業	在学中	在学中	在学中	在学中	既納(入会時)	既納(入会時)

既納(入会時): 入会時にお納め頂いた5000円には、入会金3000円の他2年分の会費2000円が含まれています。

同窓会収支報告および平成3年度予算案

	平成元年度予算	平成元年度決算	平成2年度予算	平成2年度決算	平成3年度予算
前年度繰越金	3,223,570	3,309,840	3,809,592	3,809,592	4,229,603
入 会 金	1,150,000	1,200,000	1,200,000	700,000	1,100,000
年 会 費	240,000	394,100	400,000	74,700	300,000
預 金 利 息	120,000	112,309	120,000	88,064	120,000
名 簿 代 金	—	—	800,000	798,000	200,000
会 報 広 告 代	100,000	0	100,000	0	100,000
小 計	1,610,000	1,706,409	2,520,000	1,660,764	1,720,000
収 入 合 計	4,833,570	5,016,249	6,429,592	5,470,356	6,049,603
通 信 費	30,000	181,852	20,000	3,434	150,000
事 務 費	25,000	34,590	20,000	12,819	20,000
人 件 費	260,000	51,000	300,000	243,500	200,000
交 通 費	50,000	0	30,000	25,580	40,000
設 備 費	150,000	0	100,000	73,000	100,000
役 員 会 経 費	25,000	0	20,000	11,000	20,000
会 報 印 刷 費	500,000	384,190	400,000	0	600,000
会 報 郵 送 費	450,000	401,625	450,000	0	450,000
名 簿 印 刷 費	—	—	600,000	480,000	—
名 簿 郵 送 費	—	—	300,000	291,420	—
学 友 会 後 援 会	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
C G コ ン テ ス ト	—	—	—	—	225,000
小 計	1,590,000	1,206,657	2,320,000	1,240,753	1,905,000
次 年 度 繰 越 金	3,243,570	3,809,592	4,109,592	4,229,603	4,144,603
支 出 合 計	4,833,570	5,016,249	6,429,592	5,470,356	6,049,603

*平成元年度前年度繰越金に86,270円の不明金がありました。

*“—”は、その年度に計画されていないものを示します。

同窓会会員名簿第2号追加注文の御案内

会員名簿第2号が、平成2年10月発行しました。現在、在庫が多数ありますので、会員の皆様方へ、注文下さいますようお願い申し上げます。

価格 2, 0 0 0 円

なお、注文は巻末の会員カードの通信欄を御利用下さい。電話での注文は受け付けません。

「 熱意ある 同窓会スタッフ を求めます 」

応募資格：TUT修了・卒業の方

(名古屋，豊橋近郊)

勤務：年3回程度の会議

及び自宅での作業(約30hr/年)

待遇：同窓会規定により優遇

交通費支給

問い合わせ先：TUT同窓会事務局

* 豊橋技術科学大学同窓会会則 *

第1章 総 則

- 第1条 本会は、豊橋技術科学大学同窓会と称する。
- 第2条 本会は、本部を豊橋技術科学大学内に置く。
- 第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、豊橋技術科学大学の発展に寄与することを目的とする。

第2章 事 業

- 第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
- (1) 会員名簿の発行
 - (2) 会報の発行
 - (3) 総会の開催
 - (4) その他、本会の目的を達成するために必要とされる事業

第3章 会 員

- 第5条 本会は、次の会員をもって組織する。
- (1) 正 会 員 豊橋技術科学大学学部卒業生で同大学大学院修士課程に在籍していない者
 - (2) 準 会 員 豊橋技術科学大学大学院および同大学学部在學生
 - (3) 特別会員 豊橋技術科学大学の現職又は退職教官で、役員会において推薦された者
 - (4) 賛助会員 本会の目的を賛助する者で、役員会において推薦された者

第4章 役 員

- 第6条 本会に次の役員を置く。
- (1) 名誉会長 (豊橋技術科学大学学長)
 - (2) 会 長 1名
 - (3) 副 会 長 2名
 - (4) 理 事 若干名
 - (5) 監 事 3名
 - (6) 評 議 員 各系各期1名
 - (7) 顧 問 若干名
- 第7条 役員を選出は、次の各号に定めるところにより行う。
- (1) 会長は、正会員のうちから役員会により選出する。
 - (2) 副会長及び監事は、正会員のうちから会長が推薦する。
 - (3) 理事は、正会員のうちから評議会が推薦した者及び会長の委嘱による若干名とする。但し、理事の過半数は正会員でなければならない。
 - (4) 評議員は正会員各系各期より1名推薦された者に会長が委嘱する。但し、各系各期は原則として学部卒業の時点でグループ分けするものとする。
 - (5) 顧問は、役員経験者もしくは特別会員で役員会において推薦された者とする。

- 第8条 会長及び副会長の任期は3年とし、他の役員の任期は2年とする。但し、留任を妨げない。なお、任期修了後も、後任者が決定するまでは、その職務を継続する。

- 第9条 1 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
- 3 理事は、庶務、会計及び会報等の編集事務を処理する。
- 4 監事は、本会の財産及び会計を監査する。
- 5 評議員は、重要な会務に参与する。
- 6 名誉会長及び顧問は、本会の運営について助言を与え、会長の要請に応じて総会及び役員会に出席し、意見を述べることができる。

第5 総 会

- 第10条 1 総会は、定期総会及び臨時総会とし、会長が招集する。
- 2 定期総会は、3年に1回10月に開催することを原則とする。
- 3 正会員の100名以上が、会議の目的事項を示してその開催を請求したとき。
- 4 会長は、総会を招集するとき、事前に文書で正会員に通知しなければならない。

- 第11条 総会は、次の事項を審議し、議決又は承認する。

- (1) 事業計画及び収支予算
- (2) 事業報告及び収支決算
- (3) 会則の制定・改廃
- (4) その他、同窓会の運営に関し、重要な事項

- 第12条 総会の議事は、出席正会員の過半数で決め、可否が同数のときは議長が決める。但し、会則の改廃は、出席正会員の3分の2以上の承認を必要とする。

- 第13条 総会の議長は、その都度正会員のうちから選出する。

第6章 役 員 会

- 第14条 役員会は、第6条第2号から第5号までの役員により構成する。

- 第15条 役員会は、会長が招集し、次の事項を審議する。

- (1) 総会で決定された事業
- (2) 総会への事業報告及び決算報告
- (3) 総会に提出するその他の議案
- (4) 特別会員及び賛助会員の推薦に関すること

- 第16条 役員会の議決は、役員会を構成する役員の過半数が出席し、その過半数の同意を必要とし、可否が同数のときは議長が決める。但し、出席できない役員は委任状をもって出席役員に議決を委任することができる。

- 第16条の2 役員会の議長は会長が務める。

第7章 会 計

- 第17条 本会の運営に必要な経費は、会費、寄付金、その他の収入をもってこれに充てる。但し、必要に応じて、総会の議決により、臨時費を徴取することができる。

- 第18条 本会の会費は次のとおりとする。

- (1) 入会金 3,000円
- (2) 会 費 1,000円

- 2 会費の納入は正会員のみとする。

- 3 正会員もしくは準会員として初めて本会に入会するときには、入会金及び初期2年分の会費を納入する。

- 第19条 既納の会費は原則として返納しない。但し、準会員が卒業もしくは修了以前に学籍を離れた場合に限り、半年以内に請求があれば返納する。

附 則

正会員は、3年日から年会費を納付しなければならない。

本会則は、昭和61年10月12日から施行する。

- 第20条 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月末日に終わる。

第8章 雑 則

- 第21条 本会則施行に必要な事項は、役員会の議を経て会長が定める。

附 則

- 1 本会則は、昭和58年10月9日から施行する。

- 2 会員は、住所、氏名、職業を変更の都度、すみやかに本部に通知しなければならない。

現在の大学の周囲の風景（南方より撮影）



左端に新しく知識情報課程が建設されました。また昨年待望のプールが、体育館南に設置され、学生・教職員により大いに利用されています。このように大学は少し変わりましたが、あのなつかしいにおい、そしてビニールハウスは健在しています。

編 集 後 記

今回初めて編集の仕事に携わり、会報づくりの難しさを実感した。仕事の役割分担を明確にしたことと、大学内にいる同窓会役員の援助のおかげで比較的原稿が集まりやすかった。ここに感謝する。昨年度までは、学外の編集委員がこの仕事を担当していたということを考えると、本当にご苦労様でしたと言いたい。本会報は、卒業生のみなさんが喜んでくれる会報を作ろうということで、役員が何回も議論して企画したものである。したがって、新入会員の名簿は削除し、その分大学の中の紹介を重視した。いま考えてみるとやはり、「会員からの原稿も載せるべきであったかな」と思っている。もし原稿依頼があった時には、よろしく願います。少し、グチっぽくなりますが本同窓会をもう少し盛り上げていかなければ、同窓会が消滅する可能性があるということを付け加えておきます。会員の皆様は、それぞれの分野でご活躍のことと存じます。忙しいことも分かっております。会員諸氏のリアクションを期待します。

最後になりましたが、この会報ができるにあたり、快く執筆をしてくれた皆様に心より感謝します。